

---

0から始まる創造世界-ファンタジア-{創記伝承Oldius-オルディアス-プロローグ}

る~り

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

0 から始まる創造世界・ファンタジア・創記伝承Oldius  
・オルディアス・プロローグ

### 【Nコード】

N4065C

### 【作者名】

るり

### 【あらすじ】

ある実験をしていた教授、有坂光樹は実験中に異世界に飛ばされてしまう…。そこで発見した得体のしれない奇妙な装置はある誤動作によって、病弱な自分の愛娘あかりに、異世界を創造する力を与える。そして彼女は創像界オルディアスを創ってゆく…。

## #00 発端：実験事故（前書き）

長編になる予定のファンタジー小説です。

だいぶ長く温めていた自作ゲームのシナリオを文章化・

リメイクした小説ですが：まだ作者自身どんな結末になるかわかりません。（・・・）

- - はルビがわりに使用しています。

#00 発端：実験事故

「ここは…どこだ……」

辺りを見回すと、

上には果てしなく広がる青…

下には果てしなく広がる白…

上をよくみて見ると、白いのがいくつも見える。

「空だ…」

一人呟き、この状況をすこしでも把握するように自分に確認していく。

下には、白い床…らしきものが果てしなく続く。本来、床にはあるはずの継目がどこにもないから、らしきものとしか言いようがない。

3

「ここは…どこなんだ…。」

もう一度、自分に問い掛けるが答えは出ない。

(どうして、こんな所に来たんだ…?)

ここに来る前の事を、思い出してゆく。

「有坂教授。そろそろこの実験も最終段階ですね。」

12畳くらいの白い部屋の真中に、かなり大きなガラスケース。

中には何も無い、その前に彼女と私は立っていた。

彼女は助教授の志田法子しのだのこ。身長は小さいが、スタイルは良い方だと思ふ。私の自慢の教え子であり、信頼できる仲間だ。

ポチッ

ウイ…ウイーン

一息ついた後、意を決して装置のスイッチを入れる。音もなく、ガラスケースの中で黒いガス状の塊が出来始める。

それを確認した彼女は、ガラスケースから少し離れたところにある計器類を見ている。

「圧力、電圧…全て正常です。」

カシヤ

ガタガタガタガタ…

次のスイッチを押すと、ガラスケースの中に様々な材質の破片が投入される。

（成功してくれ…）

少しづつ、黒いガス状の塊に吸い寄せられて行く、様々な破片。

（そのまま飲み込んで…）

そう、この装置は人工的にブラックホールを作り出し、段階的に物体を吸い込ませる実験装置だった。

全てを飲み込んだブラックホールは、何事もなかったように渦巻いている。

（いった…）

しばらく続いた静寂を彼自身の声が破る。

成功したかわからない緊迫感と期待の混じった声で、彼女に指示する。

「志田君。各ゲージの状況は!？」

「各ゲージ正常…。成功です!！」

「第一試験、終了。第二試験開始。」

成功した喜びを押さえつつ、冷静に次へのステップを告げる。

カシャ

ガタガタガタガタ…

次のスイッチを押す。先ほどより、少し大きめの破片がガラスケースの中に入っていく。

ここまでは先ほどのステップと変わらない。

全ての破片がブラックホールの中心に集まりかけた時、異変は起こった。

計器を見ていた彼女から、不安と驚愕を隠し切れない声で異常を告げられた。「全ゲージ、フラット!緊急停止を!！」

それを聞いた彼は、慌ててメインスイッチを切る。

しかし、ブラックホールは何事もなかったように渦巻いている。放射状に集まる破片をすこしずつまとめながら…。

ポチツ…ガシャン…ガシャン…

慌てて、全ての装置を一つづつ停止する彼の行動も空しく、全ての電源を落としてもブラックホールは消えなかった…。

「有坂教授…。」

「……………」

不安に押しつぶされそうな彼女の声に、彼は何も答えられない。

次に発した彼女の言葉は、驚きに満ちた声…。

「あ…あれは何…!?」彼もガラスケースの中を見て啞然とする。

「な…何がどうなってるんだ…!?」

二人が目にしたもの。

黒いガス状の渦の中に、あらゆる物質と融合した血色の球体。血色の部分は脈打ち、上から光の球を出しては、下から取り入れている。その軌道は、まるで地球の磁力線のように。ぼう然とした二人を、さらに異変が襲う。

「キヤーツ!!」

「ウアー!!」

ガラスケースの中にある物体から、光の波が押し寄せる。

光の波に飲まれた時、二人は意識を失った…。

#00 発端：実験事故（後書き）

もともと、ゲームのシナリオを小説化したので、かなり伏線の多い小説になりますが…いかがでしたでしょうか。

ご意見、ご感想をお聞かせ頂けると幸いです。  
では、また次回作でお逢いしましょう

#01 搜索：現状把握

(そうか…私は、あの実験の事故でここに…帰る方法を探さなければ…)

不安は拭えなかったものの、ここに来た経緯が分かっただけでも心の支えになった。

状況は未だ分かっていないし、帰るための糸口は何の手掛かりもないのだが…。

辺りをもう一度よく見渡す…。

「あ…あれは…!？」

先ほどは見えなかった光が見える。何かあるのだろう。

(さっきは見えなかったが…私が困惑して見えなかったただけなのか…)

この先何が起これとも限らない。慎重にならなければ…。

彼は、ゆっくりと周囲を確認しながら、光が見える方向へ進んで行く。

段々と、近づくうちに形のシルエットが鮮明になっていく。

「な…なんて事だ…」

形がはつきりした時、彼は叫んでいた。

なぜなら…目の前に現われたのが、あの実験で見た奇妙な物体と極めて酷似していた。

たった二つを除いて。

一つは大きさ。巨大なんて比ではない…まだ100m以上離れているのに、ガラスケースの中にあつたものより大きく見えるのだから…。  
本体だけで、50mはあるのだろう。

二つ目は、電機機器的な台の上の三脚に乗っかっている事。さらに近付いていくと、三脚は台と同化していて、ケーブルが本体と繋がっている。

(という事は…)

彼は、本体とは逆の方向に繋がっているケーブルを目で追っていく。

そこには、何らかの大きな装置が見える。

(あの物体の事が、何かわかるかも知れない…。)

彼は向きを変え、装置のある方へ進んで行く。

場所に着くと、それは装置ではなく施設のようにだ。

施設らしき壁を見上げながら、周囲を確認する。

あの球体側の壁の上の方には、ちょうどカメラの望遠レンズのようなものが付いている。あの球体と関係があると見て間違いなさそう  
だ。

反対側には、ドアらしきものがある。

一旦、躊躇したもののそのドアらしき場所から施設の中へ入ろうと  
試みる。

ピピッ…ピピッ

サーッ…

前に立った瞬間、電子音の後にゆっくりと前が開けてゆく。

中に入ってしばらくすると、またあの電子音。

ピピッ…ピッ

サーッ…ガタン

ドアは閉まるのと同時に、見渡すにはちょうどいい光が目に入ってくる。

しかし、いくら探してもあるはずのものが無い。

(どうなってるんだ…!? 照明らしきものが一つもない。光はあるのに関わらず…。)

研究者として気になるのだが、まずは元の世界に帰る事を考えなければ…。唯一の手掛りはあの球体だけだ。まずはあの球体が何なのか調べないと…。

施設を調べるうちに、ある疑問が頭をよぎる。この施設の装置を全て調べた時に、確信が変わる。

(なぜ…私が知っている装置だけなんだ…!?)

そう。中のプログラムは知らないものなのだが、装置そのものは全て扱ったことがあるのだ。

(まるで…私が使うのを知っているのか…!?)

誰かの意図…もしかしたら、この世界の意図が働いているのかも知れない。

それでも、あの球体を調べるにはこの施設を使わなくてはならない。いろいろと装置を調べるうちに、自分の事で一杯になっていて忘れていた事に気付く。

(志田君はどうしたんだ…?)

その頃、彼女はいなくなつた彼を探していた。

あの実験室の中で…。

目を覚ました彼女は、全ての装置の電源が消えていてガラスケースの中には何も無い事を確認して、彼を探していた。

(どこにもいない…。教授はどこに行ったんだらう?)

この部屋には誰もいないとわかると、部屋を後にした。

(冷静にならなきゃ…)

まだ状況を何も把握してない。

(まず、教授がどこにいるのか絞らないと…。)

彼女は従業員専用の出入口に向かった。IDカードのアクセスログで教授がこの施設内にいるかが断定できると思ったから…。

IDカードを、出入口のチェック用スキャナとは別の、ログ閲覧用スロットに差し込む。

この施設では、自分を担当している教授や、これから担当したり共同作業する、助教授や助手の出入がわかるようになってる。

ピッ…ピッ…

IDカードのスクリーンが終わると、いくつかの名前が出力される。

(相田…有坂…あ、あった!)

有坂教授の名前は、入場を示す緑色で描かれている。

(やっぱり外出はしてないなあ…。)

まだ彼女は、あの実験事故で彼が異世界に飛ばされたとは思っていなかった…。

## #02 競合：二重起動

ポチッ…カタッ…  
カタカタカタ…

施設の中、彼は時々手を止めて考えながらも、慣れた手付きで装置を操作していく。

装置自体は全て扱ったことのある機械。

ここの持ち主も、相当使いこなしていたのがわかる。

ここの装置たちはスペックはいいのだが、他との互換性は極端にクセがある。

だから、これだけの装置を接続するには一つ一つの装置を知り尽くしていないと、競合によるエラーで使い物にならない。

(少し落ち着かなくては…)

今まで操作していた装置から離れ、入口付近にあるデスクに腰を下ろす。

(少し、考えよう…)

今までに分かったことは二つ。

今いるこの世界と、今まで生きてきた世界は、間違いなく別のものであり、たぶん近似値も低いということ。

もう一つは、この装置の名前や色々なデータから推測すると、可能性を司る装置のようだ。

この装置の名前は、

『1/0システム』

どこがどうなっているのかはわからないが…一つ一つの可能性を引き出し、判断して…実行するか、消去するかを決めているようだ…。

(可能性は無限に存在する…というところか…)

1/0という式は数学では、まずタブーなのだ。  
等式にすると、

$$1/0 =$$

この式に、0をかけると…

$$1 = *0$$

と、どんな数を0でかけても1になると…といつとんでもない式になってしまうのだ。

だから、数学では0でわることはタブーとなっている。

そんなとりとめのないことを考えていると…

突然、画面が赤くなり、アラームが響き渡る。

「これは…偶然なのか!？」

画面には、すぐく見覚えのある場所が映し出されていた。

それは、あの実験事故のあった実験室。

彼女が装置を起動させて、この世界にも存在する『1/0システム』を観察している。

(エラー…:このこと同じ装置…:そうか!)

彼は動き出すと、彼女とコンタクトできる方法を探す。

装置には、こちらから操作できるマイクやスピーカーなどの音響装

置は見当たらない。

唯一あるのは、『1/0システム』につながるスピーカーのみ。

(どうすれば…志田君に伝えられるのか…)

「と…なに…ない…」

(よく聞き取れないが…間違いはない。)

彼は一縷の望みを託すかのように、『1/0システム』に繋がるスピーカーの側に行く。

そして彼はスピーカーに向かい、部屋に響き渡るくらい大きな声で叫ぶ。

「志田君、そちらの装置を緊急停止！聞こえるか？緊急停止だ！」

(聞こえただろうか…。)

しばらくすると、鳴り続いたアラームが止まり、静寂に包まれた。

「どつやら…間違なかったようだな…。」

しかし、しばらくするとあることに気付いた。

「まずい…！このままでは…！」

今まで100.00%だった表示は、95%にまで下がっている。少しづつ上がっているものの、どこまで戻るかはわからない…。

長い時間のなか、その表示を祈るように見つめる。

(97…98…99…)

しかし、100%には届かずに99.98%を表示して止まる。)

あと、0.02%…何が起るのか…。)

この時はまだ、自分の一番身近なところで、大きな影響がくることを知る由もなかった。

一方、彼女は施設内を探し回った結果、彼があ装置によって、

取り込まれたか、  
飛ばされたか  
のどちらかで、この世界にいないと推測する。

(こうなると…もう一度、あの装置を起動するしかないわ…。)

何が起こるかわからない不安と…もしかしたら彼を救えるかも知れない期待とで押し潰されそうになりながら、急いで実験室に向かう。装置に破損がないかを確認すると、メインスイッチを入れる。

ウィ…ウィーン

事故を起こした時と同じように操作していく…。

そう。彼女は同じ手順を踏むことで、同じ事故を起こし、確かめようとしていた。

ただ、あの時は二人だったし、操作は彼がやっていた。

でも…彼女は、この方法にかけるしかなかったのだ。

ポチッ

ガタガタガタガタ…

音もなくブラックホールは吸い込んでくれた。

「第一試験、終了」

間をおいて、スイッチを押す。

ポチッ

ガタガタガタガタ…

(お願い…もう一度…)  
彼女が願ったその時、ブラックホールを中心から光の波が押し寄せ  
る。

「き…来た！」

光の波がおさまったときに見えたのは…  
あの事故の時と同じ、奇妙な球体。

(成功だわ！でも…彼は喜ばないわね…。)  
二度も事故を起こしたということは、装置や実験自体に何らかの欠  
陥があるとしたか考えられないからだ。

近くに行つて、確認してみる。

あの事故の時と変わらず脈打ち、光の球を出しては取り込む。

「とくに…何もないわね…。」

しばらく観察していると、聞き慣れた声が球体から聞こえた。

「し…きんきゅ…」

きこ…うてい…」

うまく聞き取れなかったが、彼女はすぐに行動に移る。

メインスイッチを切り、他のスイッチを次々と停止させていく。

彼女の頭のなかで、

あの事故の時の、彼の言葉と…

今の聞き取りづらい、言葉が重なったからだ。

「また…振り出しかあ…。」

聞き取りづらいが、緊迫した彼の言葉に、反射的に装置を停止したが…

同時にまた彼を取り戻す方法を失ってしまった。

そのことが、彼女の気力を落としていた。

一瞬、一つ…光の球が遠くへ通りすぎていったのも気付かないほどに…。

### #03 少女：想記継承

とある街にある、

『大樹総合病院』

名前にしては小さな総合病院。

もともと、循環器（特に重度の心臓病）を専門とする病院が、風邪を引いたり、怪我したりした時に呼んでいた医者を常駐させる度に診療する科が増えた。そういうきっかけで、総合病院になったのだから、小さくても仕方がない。

ただこの地域では、なくてはならない医療施設になっていた。

なにかが、四階建てのその病院に向かっていく。

そう…あの時の光の球だ。

まるで、行き先が分かっているように5階の窓から、奥の病室へと向かっていく。

4階建てなので、実際は4階だが、縁起が悪いのでだいたいの病院に4階はない。もちろんこの病院にもない。

その病室は個室では、ひとりの少女がベッドの上で寝ていた。光の球は音もなく少女に近付くと、胸の辺りで止まり…そして少女の中に消えていった。

光も何もない場所…。少女はひとり、その場所に浮かんでいた。

（これは…夢…？）

少女は漠然とそう思う。

その時、声が聞こえる。

「あなたがこの世界を決めるのです…。」  
高く響きのある、優しい声。

(世界を…決める…?) 少女はいきなりの声と命令に、疑問と不安を抱きながら呟く。

その呟きで察したかのように、声は聞こえる。

「私はアイデア、創造するもの。」

あなたはわたしの力を受け取り、この世界を創造するのです…。」

(わたしが…創造する…世界を?)

まだ少女は困惑している。

「世界があなたがたを必要としているのです。あなたを中心とする縁の深いひとたちに…。」

(……………)

少女は考える。ただ漠然とした不安と、あまりにも突飛な展開に、何も思い付かない。

声は聞こえる。

「願うのです。あなたの思っていることを…。」

(わたしは…空をみたい。)

少女は、青い空を願う。そうすると…浮かんでいた身体が、ゆっくりと落ちて地面に着地する。上には青い空が広がっていた。下は何もない白の空間。

「そら…?…青い空!」

少女は驚きに満ちた声で、呟く。

しばらくすると、今までの不安が溶けたかのように、好奇心が少女の中で動き出す。それは少女を通して、世界を変えていく。

(世界を創るって、こういうことなんだあ。)

少女の周りには花が咲き誇り、100m先には小川が流れている。その先には、山や海、草原や湖…まるで、人間の手が加わっていない自然豊かな場所に…世界が変わる。

目の前に広がる光景に感動していると、また声が聞こえる。

「そろそろ、あなたのいた世界に戻りましょう…。またこの世界に戻るように…。」

その声を聞いた少女は、突然睡魔に襲われた…。

コンコン

ガラガラガラ…

「あかりちゃん。検温の時間よ。」

「あ…はい…。」

「寝ていたの？」

少女は、眠そうにコクリとうなづく。

(あれは…夢なのかな…)

そう思いながら、看護師さんから体温計を受け取り、脇の下に挟む。ピピッ

体温計の音。脇から外して、液晶を確認する。

(36.2、今日は熱ないみたい…。)

そして、看護師さんに渡す。

「今日は熱ないみたいね。でも、あまり無理しちゃダメだからね。」  
体温計を受け取り、確認した看護師はそう言って病室を後にした。

(夢だったのかな…)

少女がそう思っ窓の外を眺めたとき…

「夢ではありません…。オルディアス…あなたの世界であり、この世界の全てに影響する世界…。」

(オルディアス…)

自分の作ったあの光景が、頭のなかで広がって行く…。

「あなたに、これを…」

膝の辺りの布団の上に野球の硬球くらいの光の球がある。

少女は両手に取ると、光の球は手に吸い込まれていった。

（あれ…なくなってる…）

「目を閉じて、あなたのカードを見たいと願ってみて…あなたには、見えるはず…」

その声を聞いて、少女は目を瞑ると、願い始める。

少女の中で、うっすらと…少しづつ輪郭が見え始める。

（魔術師…）

「そう…マジシャン。」

始まりのカード…。

「

（始まり…）

「そう…。あなたがこの世界の…全ての始まり…。

他のカードを持つ者とともに…世界を導くのです…。」

（他のカード…！？）

「そう…あなたとの繋がり…の深いひとびとが…カードを宿しています。」

（繋がり…の深い…）

少女は、自分の知っている人を思い付く限り思い浮かべて行く…。

お父さんや、お母さん…友だちや学校の先生…。

でも、ほとんど病室にいる少女にとって、あまり親しい人は多くない…。

（待つしかないよね…）

今は病室にいることしかできない少女…期待と不安を抱えながら、ベッドで身体を休めていた。

## #04 帰還・自己往来（前書き）

この章からは、  
少女：あかり  
の視点を中心に  
進行していきます。

## #04 帰還：自己往来

ガラガラガラ…

わたしは、扉の方をみると…嬉しくなった。  
いつもの3人組。

(陽ちゃんたちだ!)

二日に一度は来てくれる、一番仲のいい友だちで…相談役でもあるんだ。

陽ちゃんたちは高校生で、年は離れてるけど…わたしのこと、友だちだって思ってくれてる。

「あかりさん。今日はどう?」

いつも最初に具合を聞いて来るのは紗夜・さや・ちゃん。

「だいじょうぶだよ。熱もないし…。」いつも優しく、よく気が付く紗夜ちゃん。

「そっか。でも、あまり無理するなよ…。」

実の妹みたいに、気さくに接してくれるのは、陽・よう・ちゃん。

「じゃあ、話してもいいかな…?」

色んな噂や情報を仕入れては、教えてくれるのは愛美・まなみ・ちゃん。

三人とも、中学の同級生になってからの友達で、高校も三人一緒なんだ。

「うん。今日はどんな話かな?」

わたしは、そう言くと、愛美ちゃんは話を始めた。

「今日は噂とかじゃないんだけど…昨日、ちょっとした夢を見たの…。」

「……………」

「もしかして……………」

「え……。じゃあ陽たん、紗夜たんも……………」

「夢ってどんな夢を見たの？」

「おどろかないで聞いてね……………」

そう紗夜ちゃんが話しはじめた。

「夢の内容は……………病院にきてみると、病室にあかりさんがいなくて……………探してみると、急に光に包まれて……………すごく自然の多い場所で、あかりさんに出会っただけ……………」

「あかりたんから、カードをもらっただけ……………」

「カードには何もみえなかったんだ。」

「そう……………。わたしはその時に、目が覚めたの。」

三人とも同じ夢……………。

夢の中のわたし、絵の見えないカード……………。

(……………!?……………カード!)

わたしは思いだしたように、思い浮かべていく。

(一緒にわかんないけど……………ひとりづつなら、わかるかも……………。)

「えっと……………もしかしたら、わかるかも……………。そのカード……………」

「あかりさん？」

「本当なの？あかりたん。」

「……………。あかりを信じてみるよ、あたしは。」

(陽ちゃん……………。)

陽ちゃんの一言に、わたしは決意する。

「陽ちゃん。手を……………」

わたしは両手を握るようになると……………陽ちゃんのみる。

陽ちゃんはわたしの手を包むように、握る。

(陽ちゃん……………。行くよ!)

わたしは、心の中で陽ちゃんのカードを探すように目を瞑って集中する。

(あ……………明るい……………。)

空……？

そうか…太陽だ！

目を開けると陽ちゃんが どうだった？ という目で訴えている。

「陽ちゃん。太陽だったよ。」

わたしがそう告げると、

「太陽か…。そうなんだろうな。」

陽ちゃんは、何か分かっていたみたいに呟く。

「次はわたしだね。」

そう言つて、愛美ちゃんは手を差し出す。

わたしは、愛美ちゃんの右手を両手で握ると、残った左手で握りかえしてくれた。

（愛美ちゃん、いくよ。）

わたしは再び目を瞑り、集中する。

（真っ暗……夜空…なんか光ってる……星だ！）

目を開けて、愛美ちゃんに告げる。

「愛美ちゃんは、星だよ。」

「星かあ…。うん、ありがとう。紗夜たん、次だよ。」

愛美ちゃんに言われて、紗夜ちゃんはコクリとうなづく。

わたしは紗夜ちゃんに手を差し出す。紗夜ちゃんは優しく両手でわたしの手を握る。

（紗夜ちゃん…。行くよ。）

わたしの気持ちが届いたみたいに、紗夜ちゃんはコクリとうなづく、目を閉じる。

わたしも目を閉じて、集中する。

（暗いけど、さっきより明るいかな……まあるく、優しい光…月だ！）

目を開けると、紗夜ちゃんはわたしに軽く微笑む。

「紗夜ちゃんは、月だね。」

「ええ。そうでしたね。」

「紗夜。もしかして見えたのか…？」

「ええ…。そういえば、あかりさん自身のカードは見えないの…？」

「わたしは魔術師だったの…。」

「魔術師ですか？…月、星、太陽…。」

「それって、タロットカードじゃないかなあ？」

「タロットって占いのだろ？」

「そうそう。そうだと…他に18枚…。」

「あの…あかりさんは、同じ夢でしたか？」さすがに、紗夜ちゃん。すぐ気が付く。

みんなに、光の球とか、あの世界の説明をする。

だいたいのことを話終えた時…声が聞こえた。

「さあ、導かれし者たちよ…オルディアスへ…」

あの時と同じ…突然の光。

光が弱くなって、目が慣れたところには自然の多い景色に変わっていた。

（また、ここにきたんだ。）

この世界にいるときは、動き回ったりしても具合悪くならないみたい。普段は痛みやだるさで重く感じる身体が、羽根が生えたみたい。軽く感じる。

「ここは…どこ？」

陽ちゃんはまだ信じられない様子みたい。

わたしも、最初は信じられなかったけど。

「ここは、オルディアスって言うの。それに…」

わたしは、目を閉じて願う。

「え…どうして急に…!？」

愛美ちゃんも、驚いてうわずった声になってる。確かに、目の前に

いきなりテーブルと人数分のいすが、急にでてきたらビックリするよね…。

「あかりさんは言ったのはこういうことなんですね…。」

「どういうことだ…。紗夜。」

「あかりさんは世界を創る力がある…ということとは、空間や物を変えたり、作ったりできる…。」  
「じゃあ、あかりさんは、この世界の創造主ってことなの…。」

「えっと…アイデアって人から…世界をつくって…って言われたの…。」

「アイデアって…。病院の音がそうなのか…？」

「うん…。」

「アイデア…創造、想像を司るもの…。」

「確か…イデオロギーなどもこのアイデアから来てるそうですね…。」

「そういえば、『親しい人たちと…』って、話があつたよな…？」

「多分、あかりさんをフォローするという事ではないでしょうか…。」

「どうやって？わたしたちには、そういう力は持ってないと思うけど…。」

「たとえば、人ひとりが知っている事はあまり多くないと思います。でも、何人が集まれば話すだけで、かなりの事の知ることができま…。」

「そっかあ。わたしたちは、いつも通りあかりさんと一緒に遊んだり、相談に乗ったりすればいいんだよね。」

「まあ、今のところあたしたちはそれしかできないからね。」

わたしはいてくれるだけで、すごく気が楽なんだけど…。  
それを察したかのように、紗夜ちゃんが続ける。

「この中ではあかりさんが一番若いから、わたしたちのほうを知っていることが多いです…それにいつも一緒にいるわたしたちがいれば、あかりさんも心強いと思いますよ。」

「うん。そっだよな…。」

「そういえば、元の世界に帰るには…どうするんだ？」

この前は、イデアさんに呼ばれて…戻ったんだっけ…。

「わかんない…。」

「えっと…一つ提案なんですけど…。」

紗夜ちゃんのことだから、何か考えがあるんだろう。

「なにかなあ…？」

「まず、あかりさんが意図的にこの世界と元の世界を行き来するために…元の世界に持ち運ぶことができるように、身に付けられる物があるといいのではないでしょうか？」

「そうだよな…。呼ばれないと行き来できないって、かなり制限かかるし…。」

そっか…。思い付かなかった…。

さすがに紗夜ちゃん。

「時空…：時間…時計なんてどおかな？」

ここが、元の世界のパラレルワールドなら、時空間を飛び越えるにはいいアイテムだと思うんだけど…。」

愛美ちゃんの考えかたは、この世界では結構役にたつかもしいれない。アニメや、そのもとなってる理論や法則にはすごく詳しいから。

「作ってみるね…。」わたしは、目を閉じてその時計を想うことに集中する。

(でも、『その時計どうしたの？』って言われたら…。そっか、知ってる人にしか見えなくなればいいんだ！)

わたしは想い続ける。(やっぱり可愛いのがいいよね それと、元の世界の時間がわかるといいかな…。)

完全に時計をイメージできた時、右手に何かがはまったのを感じた。目を開けると、腕にピンク色のハート型した時計がはまっている。

「できたみたいだな…。」

「まだ、そうとは限らないですよ。実際に行き来できるかどうかはやってみないと…。」

「うん…。取りあえず戻ってみよう。みんな、輪になって手をつないで。」

わたしは、少し離れて両腕を広げるように手を差し出す。右手には紗夜ちゃん、左手には愛美ちゃんが手を取る。

最後に、紗夜ちゃんと愛美ちゃんの手を陽ちゃんが取って、わたしに合図を送る。

「さあ、あかり…。」

陽ちゃんの優しく、けれど強い意思のこもった声を聞いたわたしは、強くうなづく。

「みんな、目を閉じて…わたしの病室を思い浮かべて…。」

(白い天井……ベッド…広い部屋…)

わたしにとって一番長くいる場所。

だから、簡単に思い浮かべることができる。

だんだんと今まで感じていなかった、痛みと身体のたるさが戻ってくる。

(少しずつ、元の世界に戻ってきてるんだ…)

痛みとたるさがおちついてきたとき、消毒の匂いが元の世界に戻ってきたことを知らせる。

「みんな、目を開けてだいじょうぶだよ。」

わたしも目を開けて、見慣れた視界に戻ってきたことを実感する。

「成功したみたいだな…。あかり。」

夢や幻でないことを証明ように、右腕にはあの時計がはまっている。

「でも、かなり目立つけど…だいじょうぶなの。」

わたしはコクリとうなづく、小声で

「あの世界を知ってる人だけに見えるの…この時計…。」

「それなら、確かに安全ですね。」

「これから、どうするの?」

「あの世界のことは、また明日だな。」

「あと、あかりさんの周りの人たちにも…話してみないとですね…。」

「あ…そっかあ、カードをもってる人を探さなきゃだよね…。」  
「特に病院の人で、もっている人がいれば…向こうに行ってる間、カムフラージュしやすいですね。」

(みんながいなくなるのはわかるけど、わたしが長い時間いないのはおかしいよね…。)

「そろそろ帰るよ。」

陽ちゃんが話を打ち切り、みんなに帰るように促す。

「また明日な、あかり。」

「あかりさん、お大事に。」

「色々調べておくね。」

みんなが帰った後の静まり返った部屋。

だいぶ慣れたけど、この時の寂しさはやっぱりつらい。

(でも、明日からはいろいろありそう…。)

でも今度は陽ちゃんたちも一緒にいるから、あまり不安は感じなかった。

#05 譲渡・転送時計

しばらくすると、カラカラ…と薬品などのカートが音をたてて、こちらに向かってくる。検温の時間なんだろう。

「あかりちゃん。検温の時間だけど…。だいじょうぶかな？」

「うん。だいじょうぶだよ。」

「ありがとう。入るね。」

ガラガラガラ…

扉を開けて、カートとともに親しい看護師さんが入ってくる。

検温の準備をしながら、周りをみて、

「マナたちは、もう来たみたいね。」

「うん。もう帰ったけど…。」

この看護師さんは、久美さん。

この病院の中でも、一番親しい。その上、陽ちゃんたちの…というより、愛美ちゃんの先輩。

なんで愛美ちゃんの先輩かというところ、占いやゲームのコトを愛美ちゃんに教えた人だから…。

愛美ちゃんも久美さんのコトを、“マスター”って呼んでるの。

「はい。あかりちゃん。」

久美さんから体温計を受け取り、脇に挟む。

体温を計り始めたのを確認すると、久美さんは話を始める。いつもと同じ。久美さんは、いつも違う話をしてくれる。

「わたし、最近変わったことがあって…」

「変わったって…どんなコト？」

「えっと…これなんだけど…」

目の前に出されたのは、黒い巾着袋。

よく見ると、すごくきめ細かい。たぶん、絹とかじゃないかな…。

「この袋？」

わたしが聞くと、久美さんは笑いながら首を横に振って、答える。

「違うの。問題のモノはこの中身なの。」

そういうと、中身を取り出す。

出てきたのは、カードの束。トランプよりもちよっと大きい。

久美さんは目を閉じてカードを切ると、一枚を前においた。

「あかりちゃん。表にしてみて…。」

「うん…。」

表に裏返してみると、両手それぞれに大きな花瓶みたいな器を持った女性が、水をこぼさないように移し替えている姿が描かれている。

久美さんは首をかしげながら、

「やっぱり…。」

と呟く。

「やっぱりって、どういうコト？」

久美さんは、少しの沈黙のあと、わたしを見て

「あかりちゃんに、直接見てもらったほうが早いわ。」

と、前に置いたカードを束の中に入れて、

先ほどと同じように目を閉じて、カードを切る。

また前に置くと、

「さあ、あかりちゃん。」

と、わたしに裏返すように伝える。

わたしは、うなづくくとカードを裏返す。

「あ…同じカード！」

久美さんは、やっぱり首をかしげてる…。

もしかして、こういうコトなの!?

それを察したように、久美さんの口から答えが出された。

「そう…。何度やってもこのカードが出て来るの…。」

「マジックみたいだね…。」

「そうなんだけど…。このカード、占いするのに使うから…同じカードしかでないと、使えないの。」

「そうなんだ…。」

「あ、あかりちゃんは知らないよね。このカードはタロットって言うて…。」

タロットって…どこかで聞いたような…。

あっ、そうだ!

「もしかして…魔術師や、太陽とか月のカードがある?」

「そうそう。あかりちゃん、知ってたんだね。もしかして…マナから?」

「うん。最近聞いたの…。」

「そっかあ。でも、どうしてテンパスしか出ないんだろう…。」

「てんぱらす?」

「テンパスっていうのよ、このカード。日本語では”節制”って言われてるの。」

もしかして…。久美さんも…。

「久美さん。お願いがあるんだけど…。」

「お願いって、なにかな…?」

「わたしの手を両手で握って、目をつぶっていて欲しいの…。」

「いいわよ。何かのおまじないかな…。」

と、手を差し出してくれた。

わたしは、久美さんの両手の間に手を差し出すと、久美さんが優しく包むようにわたしの手を握って、目を閉じる。

「これでいいかな？」

「うん。」

と、返事をして、わたしも目を閉じてカードを思い浮かべて集中する。

頭のなかで、だんだんとカードが見えてくる。

大きな川…ほとりに白い服を来た女性がいる。彼女のそれぞれの手には、大きな花瓶のような器を持って、水をこぼさないように移し替えている。

(川だ…あ、さっき見たのと同じ…。)

(あれ…吸い込まれて…)

吸い込まれてるような感覚はあるけど、なぜか怖くなかった。

だんだんと、水を移しているほうの器に向かっている。

器の中に入った先に見えたのは…緑豊かな世界。

(ここは…オルディアス!?)

ゆっくりと目を開けると、病室ではなく、森の中に開けた小さな草原のような場所。

(やっぱり、ここはオルディアス…。)

なぜ、オルディアスに着いたんだろう…。

一人じゃなく、手をつないで目を閉じた久美さんも一緒に…。

「久美さん。目を開けて…。」

久美さんは、目を開けて周りを見ると、少し黙っていて…急にひらめいたように、わたしに話しかけてきた。

「あかりちゃん。ありがとう…。あかりちゃんのお陰で、さっきのコトの意味が分かったわ。」

え…どういうコト？

わたしが考えていると、久美さんが説明してくれた。

「節制のカードの器は、潜在意識…自分では気付かない心の奥の意識と、顕在意識…自分が気付いている意識を表わしているの。」

「わたしは、何となくわかるような、わかんないような気持ちで…とりあえず、うなづく。」

「水は意識を表わしていて、潜在意識を顕在意識に、また顕在意識に潜在意識を移している…。つまり、現実の世界と、心象の世界を意識は行き来しているの。」

（現実の世界から、心象の世界に…。  
元の世界から、オルディアスに…。

そういう意味なんだ！）

「そっかあ！それでここに来たんだ…。」

久美さんは、あまり驚いていないわたしに気付いて、聞いてきた。

「もしかして…あかりちゃんはこのことを知ってるの？」

「うん…ここはオルディアスって言うて…。」

わたしは、今までのコトを久美さんに伝えた…。

「つまり、あかりちゃんが創造することができる世界なのね…。」

のオルディアスは…。」

「うん。そうなの…。」

（さすが、久美さんだ…。）

久美さんは、この状況に驚くどころか、すごく楽しんでる感じがする…。

わたしが、感心して見ていたのに気付いて、

「そろそろ…戻らなきゃ行けないわね…。」  
と、呟く。

それを聞いたわたしは、

「そっだね…。」

「帰ろう、久美さん。」

「どうやって帰るの?」

「えっと…わたしの手を握って、目を閉じて…。あっ、そっだね!」

(時計を持たせてあげれば、久美さんも自由に行き来できるかも…)

」

「どうかしたの、あかりちゃん?」

「うん。えっと…目を閉じて、この時計をイメージして欲しいの。」

「わかったわ。」

久美さんが、目を閉じる。

わたしも久美さんの腕に触れながら、久美さんの腕にあの時計が着いているところを思い浮かべていく…。久美さんの腕と時計が、だんだんと頭に浮かんで来る。

完全にイメージが鮮明になった時に、目を開ける。

久美さんの手首には、わたしの手首とお揃いの時計がはまっていた。

「もついいよ。久美さん。」

久美さんが目を開けると、わたしに尋ねる。

「可愛いね

これは、どんな時計?」

「陽ちゃんたちのアイデアで、この世界と元の世界を往来するための時計なの。」

「わたしだけでも、行き来できるのかな…?」

「まだ、陽ちゃんたちにも着けてないから…わかんないの…。でも、久美さんなら使えるような気がしたから…。」

「わたしが始めてなの…。いいわ。やってみましょう!

ダメなら、あかりちゃんに戻ってきてもらえればいいし…。ね?」

こういう時の久美さんは、絶対に自分の気持ちを曲げない。

「じゃあ、帰ろう!目を閉じて…わたしの部屋を思い浮かべて。」

「わかったわ。」

久美さんが目を閉じたのを確認して、わたしも目を閉じる。

病室のイメージが頭の中に鮮明になってから、目を開ける。目に映るのは、いつもの白い壁やベッド。

ちゃんと戻ってきたみたい。

周りを確認すると、ちゃんと久美さんもいる。

「久美さん。もう大丈夫だよ。」

久美さんは、目を開けると、

「戻ってきたって、どう確認してるの？」

「わたしは、頭の中でイメージが鮮明になった時がそうなんじゃないかなって思うんだけど…。」

「そういえば…あかりちゃんは、この時計いつ着けたの？」

「昨日からずっと着いてたの。知ってる人にしか見えないし、触れない時計だから…。」

「そうなんだ…。不思議ね時計ね…。」

(そういえば久美さん、だいじょうぶなのかな…。)

わたしは不安になって尋ねる。

「久美さん。いつもより長くいるけど、時間はだいじょうぶなの…？」

久美さんは、微笑みながら、

「だいじょうぶよ。あかりちゃんのところに来る時は、長くなってもいいようにしてあるから…。心配してくれて、ありがとう。」

「ううん…。愛美ちゃんなんか…いつも時間忘れて話してて、陽ちゃんに、そろそろ帰ろうって言われて気付くから…。」

「マナは相変わらずね…。今度、気をつけるように言っておくわ。じゃあ、またね。」

久美さんは、そういうとカートとともに、ナースステーションに帰っていった。

#06 発覚：模索接合（前書き）

ここから、傍観視点に変わります。

#06 発覚：模索接合

一方、そのころ…彼は外を映すモニターを見た途端、別の時空に迷い込んでしまったのかと思い、愕然とする。

既に元の世界から別の時空に飛ばされた彼にとって、また別の時空に飛ばされてしまうということは、元の世界に帰ることが難しくなる確率が高いから…。そう彼が思うほど、景色は大きな変貌を遂げていた。

一面が自然あふれる緑に変わっていた。

先ほどまで、無機質にただ白い地面が広がる世界を見ていたとは考えられない。

しかし、あの機械なのか生物なのか分からない装置は何事もなく存在している。

(一体…此処は何処だ!?)

だが、彼はすぐに気付いた。

あの球体が、可能性を司る装置だということに…。(いや…もしかしたら、帰る方法が見つかるかも知れない…。)

別のモニターを一つ一つ確認しながら、必要だと思われるデータを探していく。

「これは…!?!」

いろいろ操作していると…見覚えのあるものが映っているプログラムを見つける。

映っているのは、いろいろな絵が書いてあるカード。

(あかりの病室で見たんだが…たしか、タロットとかいていたな…。)

モニターには、22枚の半分以上が裏向きで表示されていて、表になっっているのは、

- ・マジシャン（魔術師）
  - ・テンパラス（節制）
  - ・スター（星）
  - ・ムーン（月）
  - ・サン（太陽）
- の5つだった。

（志田君なら、知っていたかも知れない…。少しはこういうのも、興味を持たないといけないな…。）  
専門分野と一般教養には強いのだが、特に占いの知識はほとんどない。男性で科学者ならなおさら占いとは無縁なのかも知れない。

もう少し詳しく調べるため、キーボードで操作しようとした時…画面に変化が起こる。

4番目のカードが反転しようとしていた。

（4番のカード…何だろうか…。）

反転して表向きになったカードには、何故か彼が映っていた。

「何だ…このプログラムは…!？」  
知らない空間で、このモニターは彼を知っていたかのように映している。

周りを探して見ても、この室内を映すカメラは見当たらない。

（モニターに、何かあるのか…？）

モニターに手を触れようとした、その時…。

画面の中の彼自身を映し出していたカードが、絵に変わっていく。

出てきた絵は、大きな椅子、冠を着けた男性、背景は城のように豪華…。

（これは、皇帝…？）

そう、エンペラーのカードだった。

彼がモニターに、エンペラーのカードを見つけたその頃…。病室にいたあかりは、頭の中に急にカードが浮かんでいた。

（皇帝のカード…。急に浮かぶって、何かあるのかな？

ここは、久美さんに聞くのが一番いいかも…。）

久美や愛美から、タロットカードの絵を教えてもらっているためか、すぐにエンペラーのカードだと言うことがわかった。

もちろん、まさか自分の父親がカードの所有者・ルーラー・だとは気づかなかつたのだが…。

あかりは、検温のために来るだろう久美を待つことに決めた。

カラカラカラカラ…

いつものカートの音。

あかりには、あまりに聞き慣れているせいか、この音で久美かどうかがすぐにわかる。

「あかりちゃん。検温よ。入っていいかな？」

「うん。だいじょうぶ。」

「じゃあ入るね。」

ガラガラ…

カラカラカラカラ…

ガラガラ…

扉を開け、カートと体を部屋の中に入れて、扉を閉める。

この早業は久美の特技の一つではないかと、あかりは見るたびに思う。

「はい。体温計。」  
あかりは久美から体温計を受け取ると、なれた手つきで脇の下に差し込む。

ピピッ。

取り出して、表示を確認する。

36.2 …まあ平熱かな。

久美に体温計を渡しながら、尋ねる。

「久美さん。ちょっといいかな？」

「だいじょうぶよ。なあに？」

「えっと…」

さきほどのエンペラーのカードを見た件を話す。一通り伝えて聞いてみる。

「久美さんは、どう思う？」

「そうね…。これだけの情報では、誰かわかんないわ…。ん…ちょっとね…。」

「もしかして…なんか気づいたの？」

「気づいたというより、思いつきなんだけど…。」

「うん…。」

「逆はできないのかな…？つて。」

「逆って…？」

「今まで、人からカードを導き出したよね…。だから、カードから人を特定できないのかな…？つて思ったんだけど…。」  
「あつ…そうだね。やってみる！」

そういうと、あかりはカードを頭に思い浮かべて、意識を集中していく…。だんだんとカードの絵が現実味を帯びた風景にかわってゆく…。

(ここは…何かの施設…?)

白っぽい床、無機質で素っ気ない壁。

天井の照明が規則的に並んで、先へのびている。

(見たことあるんだけど…どこだったっけ…?)

先へ進むと、扉が見えてきた。

扉を開けると、はつきりと思いだした。

(ここ…お父さんの研究所だ!)

あかりには、どんな機械だかわからないが…いろいろな計器や管などがあちこちにつながっている。

「あかりちゃんだよね…?」

急に声をかけられたために、現実いきなり意識は引き戻されて、あかりは何も答えられなかった。声の振り向いてみると、白衣を着た女性が息を切らせながら、あかりを見ていた。

沈黙を破ったのは、隣にいた久美だった。

「いきなり大声出さないで下さい!…って…」

と言いながら、何かに気づいたように声のほうを向く。

そして、狐につままれたように彼女に尋ねる。

「のっこじゃない!急にどうしたの?あかりちゃんがどうかしたの?」

彼女のほうも、呆気にとられていたが、すぐに状況を把握して答える。

「あ…くみたん…。ちょうど良かった!」

状況を把握していないあかりに気づいた久美は、

「のっこは、とりあえず落ち着いてね…。」

「あかりちゃん。彼女は、のっ…志田法子…しだのりこ…さん。お父さんの助手をしているから、何度か会ってるかもしれないわね…。わたしと同級生なの。」

と、彼女をあかりに紹介して、落ち着いたところを確認して、聞きはじめる。

「で…のっこは、あかりちゃんにどんな用事なの…?」

「えっと…実は、お父さんのことなんだけど…。」  
驚きを隠せない、あかり。法子は、あかりに目を合わせながら、諭すようにゆつくりと、話しはじめた。

「あかりちゃん。落ち着いて聞いてね…。実験中に事故があつて…教授、お父さんが、いなくなったの…。」

「い…いなくなった…?」

動揺する、あかり。

「どうも、別の世界に飛ばされてしまったらしいの…。一回だけだけど…連絡取れたから、生きてるわ…。でも、どうすればいいかわからないの…。」

「異世界…?飛ばされたつて…。」

あかりは、お父さんを心配する気持ちで、考えられなくなっていた。しかし、あかりの反応は、逆に久美の推理にとって鍵となり、あかりに希望を持たせるように伝える。

「あかりちゃん…。もしかしたら、エンペラーのカードは、お父さんなんじゃないのかな?」

「え…?」

久美からの答えを聞いて、少しずつ考えをまとめるあかり。

(お父さんの研究所…そして、お父さんは異世界に…。)

(異世界?もしかして…オルディアスに?)

「久美さん。もしかしたら、お父さんはオルディアスにいるかもしれないってこと…?」

「うん。もしかしたら…だけどね。可能性は0じゃないでしょ?」

話を聞いていて段々と内容が見えなくなってきた法子は、久美に尋ねる。

「くみたん、カードって何…？オルディアスって…？聞いてると、教授と関係ありそうだけど…」

「あつ…、ゴメン。のっここにはわかんないよね…。」

「うん…。説明お願い。」

「そうね…。あかりちゃん、のっこももしかしたらルーラーかも…。調べてみて？」

「うん…。」

だいぶ状況が飲み込めたあかりは、法子の前に行き、手を差し出す。

## #07 不安：多創疑念

法子さんはわたしの手を両手で握ると、目を閉じる。

（宮殿みたいな建物だけど…どこか違う…。あ、玉座に女性…。手に巻物…。ハイプリーステスだわ。）

確認すると、法子さんに伝える。

「法子さん。ハイプリーステス…女教皇のカードだよ。」

法子さんの返事の前に、久美さんが割って入る。

「やつぱり、のっこはハイプリーステスかあ…。」

久美さんのその言葉に、意味のわからない法子さんとわたしは、ハモるように

「やつぱりって…どういうこと？」

「やつぱりって…なんで？」

と久美さんに聞き返す。

久美さんは、

「あかりちゃんは、マジシャンだよ。そして、わたしはテンパラス。のっこはハイプリーステス…。」

一息つくくと、

「さらに、陽・沙耶・マナが、それぞれ太陽・月・星でしょ…。」

「うんうん。」

「始まりのマジシャン…。これは説明する必要ないわね。」

「くみたんは、それぞれの特徴をカードに見ているわけね…。」

「さっすが、のっこね…。話が早いわ。」

「学問的知識の高いハイプリーステス、現実と想像をつなぐテンパラス。これは拡大解釈だけど…。」

今までの説明でなんとなくわかるコトができたわたしは、

「太陽や月とかは…？」

と聞いてみる。

今までののは、簡単に想像がつくけど…太陽や月の意味は知らなかつ

たから。

「太陽は、リーダー格で面倒見がいいし…月は、母性的で感性が鋭いの…星は希望を意味していて、ムードメーカーかな…」

「星は、ホント愛美ちゃんらしいね…」

「そうでしょ！？だから、あかりちゃんやマナ、私のカードの関連性を考えてて…気づいたの。」

「そういえば、お父さんがエンペラーなのは…？」

「エンペラーは父親を暗示するカードなの。そのまんまね…」

「そうなんだ…」

「そろそろ、行きましようか…」久美さんのその一言で、みんなうなづき、わたしは意識を集中する。

オルディアスにいるかもしれないお父さんと逢うために…。「あかりちゃん…準備はいい？」

久美さんは、わたしを気遣いながらも、厳しい口調で言う。

「うん。行こう！」

たった一人のお父さんだからでもあるけど、オルディアスにいる可能性がある以上はなんらかの形で繋がっているもの…。

わたしは、オルディアスの中にいるお父さんをなんとか見つけようと、目を閉じて意識を集中する。

「私たちも手伝いますわ。」

さっきまでいなかった紗夜ちゃんの声に、集中していた意識が途切れ、目をあけてみると陽ちゃんたちが来てくれていた。

「これで役者はそろったわね。もうちょっと早く来てほしかったけど。」

「これでも急いで来たんだよ…。間に合ってよかったよお」

愛美ちゃんが言い訳にも開き直りにも聞こえそうな口調で言う。

「マナたちも来たことだし…行きましよう、あかりちゃん。」

久美さんは、愛美ちゃん言葉はなかったように、わたしを促す。

「うん 早く行こう！」

愛美ちゃんも続いて促す。

（いつもの愛美ちゃんなら、言い返すのに…。急いで行かなきゃだよね…。）

「みんな、行くよ。」

わたしは、目を閉じて意識を集中する。

（お父さん…。どこにいるの…。）

お父さんを思いながら、オルディアスの世界を心に描いていく…。わたしたちが着いた先は、森の中にある大きな建物だった。

「多分、この中にいるんだよね…。」

久美さんは、そう言っただけで建物に向かっていく。

わたしは、漠然とした違和感を感じながらも、先に向かう。自然いっぱいの木々のなかに無機質な白のタイルみたいな壁の建物が建っている。それだけでも、不自然だけど…。ここはわたしが想像した世界オルディアス。わたしが知らないものがあるってことは、わたし以外にこの世界を想像できるってことになる…。

でも、先に進まない限りお父さんとは会えない。

建物の入り口に来ると、わたしのことを気遣った紗夜さんが声をかけてくれる。

「だいじょうぶ？あかりさん…。」

「うん。行こう！」

わたしは自分にも言い聞かせるように、返事して、扉に向かう。

#08 合流：親子再会

扉を開けると、中も相変わらず無機質の白い壁でできている。その中に、白衣を着た男のひと…お父さんがいた。

「お父さん！」

「あ…あかり！？それに、みんなまで…何故ここにいるんだ？」

「説明はあとで。とりあえず、帰りましょう。」

久美さんは冷静に指示するけど…何か見つけたららしいお父さんは、

「ここを調べていたんだ。少しだけ待っていてほしい。」

と何かの装置を操作しながら伝える。（こうなると、何言ってもきかないんだよね…。）

わたしが帰ろうと言う前に、法子さんが割って入る。

「教授、手伝えることはありませんか？」

「…君まで、来てたのか…それなら向こうのモニターを見てくれ。」

私は何故ここを調べているか解るから。」

と、奥の装置を指さしながら法子さんに伝える。

法子さんがその装置へ駆け寄って、モニターの覗いた瞬間、

「こ…これ…。何で、ここに…!？」

すごく驚いたようで…しどろもどろに声を上げる。

その後、お父さんは何事もなかったように法子さんに伝える。

「これは、『ゼロシステム』…正確には、1/0・ワン・スラッシュ

ユ・ゼロ・システムなんだが…。」

法子さんは落ち着きを取り戻して、尋ねる。

「1/0…って、数式上のタブーのですか？」

「そう…。どうもこれは、可能性を司る装置らしい。」

「研究所での現象は、ブラックホールの影響で時空に歪みがでて、

この装置が現実世界へ干渉した…。」

「まあ、あくまで仮定だが…私も同じ意見だ。君は発生装置をもつ

一度動かしただらう？」

「はい。教授がここに跳ばされた時と同じ現象が…。」

「君が気づいてくれて良かった。気づいていなければ、もっと誤差が広がっていた…。」

「誤差…？何か異常が…？」

「実はこの装置は、二重起動がタブーらしく、何かのパーセンテージのモニターに0.2%の誤差が出ている…。」

お父さんと法子さんの話を聞いても、難し過ぎて内容がつかめないわたしは、久美さんに説明してもらうために、目配せする。久美さんも気づいてくれたみたいで、

「えっと…この施設は…お父さんと、のっこが研究してるときに、事故が起きて見た装置と一緒になんだって。その装置んだけど、可能性を作ったり無くしたりするみたい…。」

「可能性…？」

「たとえば、私たちの現実の世界では、魔法を使ったり…自由に空は飛べないでしょ？それは、魔法を使える可能性や、自由に空を飛べる可能性が低いってことなの。」

「じゃあ…空を飛べる可能性があれば、空を飛んだりできるようになるってことなの…？」

「うーん…。えっと、飛んだりできるようになるんじゃないって…その世界がそういう世界に入れ替わるの…。」

「入れ替わる…？」

「すぐろくをする時に振るサイコロがあるでしょ？」

「1から6までのだよね？」

「そう。あかりちゃんが降ったサイコロの目が、1だったとする。」

「うんうん。それで？」

「でも、2が出ても、6が出てもいいよね。そうすると…出た目が、2だった世界や、6だった世界がある…。」

「うーん…ってことは、可能性っていうのは看板みたいなものなのかな…？よく病院に書いてある矢印が書いてあるの。」

「そうね。そんな感じかな…。あかりちゃんの言葉を使うと、あの装置はその矢印を決めているものらしいの。」

「それだと、この機械は明日とか、未来がわかってるんだね…。」

「そうみたい。でも、お父さんが少しおかしいところをみつけて…それを直そうとしてるみたいなの。」

わたしは、なんとなく未来が変えられる機械なら…過去も変えられるのかな？って思って、久美さんに尋ねる。

「できるかもしれないし…できないかもしれない。「できるかもしれないし、できないかもしれない…。でも…過去が変わると、今にも影響するから…。」

「そうなの？」

「たとえば、あかりちゃんの病気が起こらなければ、私たちはあかりちゃんと出会わなかったのかもしれないでしょ？まあ、のっこを通じて会えたかもしれないけど…。」

「そっかあ…。過去に原因があるから、今がこういう状況なんだよね…。」

「うん。だから、前を向いて歩かないとね」

久美さんは、いつも私が後ろ向きな話をすると、元気を与えてくれるように明るく注意してくれる。

「うん。そうだよな」

わたしも、久美さんに励まされるたびに、思いつきり元気に応える。その時、切羽詰まったようなお父さんの声が聞こえる。

「な…何だっ!？」

法子さんもモニターを見て、驚きながらも、わたしを呼ぶ。

「え…!?!?!あかりちゃん!ちょっと来てくれる?」

わたしは駆け寄り、法子さんの横にたつて、モニターを覗き込む。

「…お…お母さん…!?!?!」

モニターに映っているのは、三年前にわたしと同じ心臓病でなくなったお母さんが映っていた。

側にいるお父さんとわたしが目を合わせると、突然モニターから白

くまぶしい光があたりを包む。

## #09 解放：札力覚醒

光が収まった後、周りを見渡しながら、久美は声をかけた。

「…みんな、大丈夫…？」

沈黙を破ったように響く呼びかけた声に、すぐに返事が返ってきた。

「あたしは大丈夫。」

「わたしもだいじょうぶだよ。」

と陽と愛美。

「紗夜ちゃんは？」

いつも一緒にいるはずの紗夜がいないので、尋ねる久美。

「えっと…あかりちゃんとお父さんがいないから探してるんだ。」

「法子さんも一緒だから、だいじょうぶだと思っけど…。」

サアアッ…。

その時、入り口の扉が開き、息を切らした紗夜が入ってきた。

「あかりちゃんたちが…急いで外へ出てきて……法子さんもいるから…。」

普段、冷静沈着な紗夜が慌てているのを見て、三人は急いで外へ出る。

外に出た三人が目にしたのは…法子と、高さ3m、幅は2mはあるだろうと思われる黒い板。三人は法子にかけよると、陽が大きな板について指を差しながら尋ねる。

「法子さん。この板はなんなんだ…？」

「詳しくはわからないのだけど…この板は、バルティアリスと言っ…。悲しみに反応して、閉じ込めてしまっらしいの…。」

「…!?!?…ってことは、もしかして二人はこの中か?」

「ええ…。間違いないわ。よく見てみると、二人が見えるわ…。」

愛美は板に目を凝らして二人を確認すると、

「確かに…見えたけど…、外からは壊せそうもないね…。」と落胆した声で伝える。

遅れて紗夜も合流し、

「そうですね…見た限りでは、ひびどころか…傷一つありません…。」

それに対して法子は、

「外から破壊してしまったら、二度と戻ってこれないみたいね…。」と、半ば自分の発言に自信を持ってずに話す。

訝しげに思った紗夜は、

「法子さん…。今気づいたのでですけど、何故この板の名前や特徴を知っているのですか…?」

「私にもわからないわ…。なんて言えばいいのかしら…。知らない知識のはずなのに、頭の中に浮かんでくるのよ。」

と、困った顔で答えた。

久美は、腕を組み少し考えた後で、

「なるほど…。多分、のつこが持っているカードがハイブリーステスだからじゃないかしら?」

「そっかあ!確かに、『知識』のカードだもんね…。」

と、愛美も久美の意見に同意する。法子はそれを聞き、もしかしたら二人を助ける方法がないか考えていると、急に頭に浮かんできたものをみんなに伝えるように声にした。

「注意しなきゃいけないことが2つあるわ。1つは、さっき言ったように外側から壊せないこと。2つ目は…。」

急に言葉を切ると、法子は叫ぶ。

「みんな伏せて!」

それを聞いて、みんなが伏せると、無数の黒い物体が石版に向かう

ように頭上を通り過ぎる。

「今のは、なに!?!」

久美は法子に尋ねると、

「バルティアリスはああやって、外の世界の情報を吸収しているの。」

「二つ目の注意は、今のものに当たらないようにすることですね…?」

通り過ぎたのを確認して、紗夜は法子に確認する。

「そう。私たちの情報が足りなければ、教授たちが違う世界だと気づくかもしれないから…。」

法子は説明も含めて肯定する。

「ということは、叩き落とすなりして…吸収させなければ、気づく確率は上がるのか?」

訪ねる陽に、愛美は反論する。

「でも…どうやって?当たっちゃいけない上に、道具も何もないんだよ?魔法とか、技が使えるってわけじゃないし…。」

「法子さん、もしかしたら、あるのではないですか?あかりさんには『創造』の、法子さんには『知識』の力があるように…私達にもカードの力が…。」

「自分達の力に気づいたようですね…。」

いきなり、みんなの頭に直接響くように声が聞こえる。

「貴女達の持っているカードを強く思い浮かべるのです…。」

優しい、暖かく凜とした声に従い、みんなは目を閉じてそれぞれのカードを思い浮かべていく。

「紡ぎなさい…。『解放』の言葉を…。」

みんなは声を合わせたかのように、頭によぎった言葉を紡いだ。

「カルドウ・インハルト・ファゾン!」

みんなは、それぞれに暖かい気持ちと、力がみなぎっていくのを感じた。

## # 10 能力：札力開放

それぞれの彼女たちの利き手に光が集まり、形を作っていく。  
光がおさまると…

陽には太陽を象った剣、  
紗夜には月を象った弓、  
愛美には星を象った杖、  
久美には取っ手の付いた瓶、  
法子には本が握られていた。

「剣じゃ…この状況では使いづらいな…。」  
陽は小さくつぶやくと、頭から響くように強気そうな女性の声が聞こえる。

『あんたがルーラーか？でも、あたしとなら大丈夫さ。』

（大丈夫って…触れたらダメなのに？投げられるとしても…）

『あたしの言った通りやれば、何度でもできるのさ！』

（え…！？何度でも？）

『チヨイとコツがあるけど…あんたなら出来るさ。』

（わかった…。信じるよ！それで、どうすれば…？）

『基本は投げて、腕はそのまま。』

ポイントに着いたら握る。

後はあんたの思い通りに振り切る。剣が手にあるように意識してな

…。

戻したい時は、手を伸ばして引き寄せる。

モノは試し、やってみな。』

陽は言われた通り、剣を石板と逆に投げる。

手を伸ばしたまま100mくらいのところで、握ると剣は床に対し  
垂直に宙に浮いたまま止まる。

（次は思い通りに…。）

陽は左足を踏み出し、握った手を斜めに振りおろし、右足を引くと同時に横に払う。

100m先では、剣は斜め…横と弧を描いていた。

手をのばすと、吸い込まれるように陽の右手に戻っていく。

『さすが、あたしのルーラー！初めてにしちゃ、上出来だ。さらに袈裟からの横払い。なかなかだったよ。あたしはサニア、よろしくな。』

(ありがとう…。あたしは陽、よろしくお願ひします。)  
パチパチ…。

「さすが、陽ちゃん！なんかマジックみたい!!」

拍手しながら、興奮気味な愛美。

「自分でも、そう思うよ。でも、これなら十分にやれそう。」

『次はあなたの番よ…。杖をかざして、思い浮かべるの。』

愛美にそういった声が聞こえた。

「思い浮かべるって…何を？」

『言葉と、そのイメージを…。』

(やっぱり最初は火の魔法だよ…。あとは言葉…あつ、そうだ) 愛美は、火のイメージを想像しながら漢字を思い浮かべる…。

すると、杖の、手で持っている少し上に液晶らしきものがある。そのディスプレイには漢字で”火球投撃”と映っている。

『気づいたわね。あなたの想像した文字が映っていたでしょう？』

(うん…。次はどうするの?)

『杖を掲げて、”カンバージュ”と唱えたら…ディスプレイを見てみて。』

愛美は杖を掲げて、

「カンバージュ！」

と唱える。

その後、ディスプレイを見ると、そこには漢字ではなく、”Flout ha”とアルファベットが映っている。

『これが、あなたの作った最初の魔法……。唱えて、ちゃんとイメージできていれば、発動できるわ。』

(うん……。やってみる……。)  
最初という緊張感と初めてという不安を抱えながら、先ほどのイメージを頭の中で形にしていく。

(あの文字で、火の魔法だから……。)  
考えがまとまると、愛美は杖を掲げて、空に小さな円を描き、

「フラーサー！」  
と唱えつつ、肩の高さまで振り落とす。

すると、杖の先から火の球が放たれ、100mくらい先で消えた。

『あなたのこと、ルーラーと認めるわ。私はステア。』

(わたしは愛美。マナって呼んで)

『これから、しっかりサポートするから。』

(うん。頼りにしてるからね)

愛美とステアの会話が終わると、紗夜に声が聞こえた。

『次はあなたですよ？』

(……私は深山 紗夜です。あなたのお名前は？)

『私はルーナ・ルミナ。星の御守・みもり・のひとりで”月”の力を司る者。』

紗夜は自分が”月”のルーラーということと、声の主であるルーナが同じ”月”を司ると言ったことで、納得し答える。

(わかりました。それで、どうしたらいいのでしょうか?)

『イメージするのです……。あなたなら、わかるはず……。』

(イメージ……。弦のない弓……。そういうことですよね……?)

そうルーナに問いかけて、紗夜は持っている弓に弦が付いていて、専用の矢を持っているところをイメージする。

『その通りよ……。構えて、イメージして……。』

(わかりました。)

弓を引くようにイメージして、目標を定める。

イメージが固まると、急に力が加わる。今までなかった弦と矢が、具現化されていることを確認し、力を抜いて矢を放つ。

矢は、地面に落ちるとバチバチと音を立て電気をまとい、消えていった。(思った通りね…。)

『紗夜さんのチカラ、拝見させて頂きました。共に参りましょう。』

(こちらこそ、よろしく願いします。)

『次はあなたよ。』

今度は久美に声が聞こえる。

(なるほど…みんな、この状態にあった訳ね…。)

今までの三人を見ていて、指示されていることに気づいた久美は、声が聞こえた時に納得し、次の指示を煽る。

(ええ。どうするのかしら?)

『わたしはエリス。あなたが久美さんですね?』

(ええ。)

『では始めましょう。もう気づいていると思うけど…私たちの力は”相位具現”。つまり…』

(私達の世界の物を、この世界に具現化できるってことね。)

『そう…。だから、目覚めさせてもらった時に、この世界に導びかれたの。』

(だから、あかりちゃんがいなくても行き来できるのね。)

『ご名答。私達のやること、なんとなくわかったわね?』

(テンパラスの両手の瓶は、顕在と潜在を入れ換える…ということ…そういうことね。)

久美は、まず二つの瓶に、今いる場所と病院をそれぞれ思い浮かべる。

そして、注射器を病院の瓶から、この世界の瓶に移すようにイメージする。

(具現化ってことは、応用できるかも…。)

久美は注射器を装着する銃をイメージしていく。  
イメージが固まると、片側が急に軽くなる。

『この感覚が、具現化の証。覚えておいてね。』

(了解。)

目を開けると、両手に瓶は無く、右手には注射器の装填された銃。  
左手には注射器のホルダーが握られていた。久美は手首をくねら  
れて、一つ一つ確かめるように目視する。

(外見は大丈夫ね。中身はやっぱり使うしかないわね…。)

『多分、できてるわ。失敗しても暴走したりはしないから…。』

久美は少し緊張がほどけて、一息つくと尋ねる。

(失敗すると、どうなるの…?)

『具現化したものが消失するだけよ。いざという時に使えなかつた  
り、精神力使うから…あまり失敗してほしくないけどね…。』  
改めて集中し、成功した状態をイメージしながら、引き金を引く。

シュ…。

勢いよく放たれた注射器。

(ここまではOK。問題はここから…。3、2、1、バースト!)  
久美のカウントと同時に、注射器が砕け炎の柱があがる。

『初めてで…オブジェクトの想像具現だけでなく、エフェクトまで  
かけるなんて…流石ね、久美。』

(エリスの力とサポートがあつたからよ…。)

『久美。あなたとなら、上手くやれるわ。』

(私もそう思うわ。エリス。)

『あなたが最後ね…。』

(あなただっただんですね？教えてくれていたのは…。)

『そうよ、法子さんでしたね…。我はイリス。知識を司る者。』

(イリスさん。この本はどう使えばいいのですか?)

知識だけであるならば、物質となる本は必要ない。法子はそう考えていた。もちろん、ここは想像世界。具現化されただけ、という可能性もある。

『開けば分かるわ。あなたなら…。』

(そうですか。わかりました。)

法子には、自分が試されていることを薄々だが気付いていた。

知識があればあるほど、言動の選択肢が増えていく…。とするならば、それをどう使いこなすかが要になってくる。

どんなものも、使い方次第で、良くも悪くもなる。

法子は一つ頷いた後、本を開いた。

(なに、この本…。)

開いたページには、ほとんど何も書かれていない…。

書かれているところさえ、薄れている。

薄れている場所を黙読する。(本…使い方…知識…。もしかして…!?)

法子は、一度本を閉じると、頭の中でイメージを組み立てていく。

(まずは、インデックスと…私の考えが正しければ、ツリー型でも可能はず…。)

イメージを固め、再び本を開くと、”使い方”と大きく見出しがあり、下に箇条書きで項目が書かれている。

(やっぱり…そうなのね。)

『そう。この世界では、想い・想像力が力になります。知識をコントロールできる想像力…。あなたとなら、力を良き方向へ使えるでしょう。』

(ええ。今後ともよろしくお願いします。イリスさん。)

久美は気付いた。

何事にも適した用途や方法はある。でも、それだけに固執してしまつと応用は出来ない…。

固定概念を破る想像力 -

想像力が凄い影響力をもつこの世界では、最大の武器になることに  
…。

## # 11 初戦：石盤乱舞

「みんな成功だね」

「そうですね。あかりさんだけではなく、私達にもこんな”力”があつたんですね…。」

「早くあかりを助けないとね…。」

「のっこ、他に方法はありそう?」

「やっぱり、教授とあかりちゃんが気づかないと難しいわ…。外から壊せないから…。」

全員が各々の能力の開放に成功したことに喜び、改めてあかり達親子を助ける方法を模索していると、愛美が異変に気付く。

「みんな、何か来るよ!」全員に緊張感が張り詰める。

「チュートリアルの後にすぐ本番って、ゲームじゃないんだから!」久美はこの状況をちやかすように叫び、銃を構えて相手を待つ。

「サニア達も力を貸してくれてるんだ。早く突破して、助けよう!」陽はそう気合いを入れて、剣を構える。

「気を付けて下さいね、皆さん。」

注意を促しながら、紗夜も集中し始める。

「当たっちゃいけないって…シューティングみたいだね。それなら…。」

愛美は思っていることを口にしながら、魔法のイメージを固めていく。

ガタガタ…

カンカン…

イナゴの大群のように、進行方向を蹴散らし、お互いにぶつかりながら向かってくる無数の石盤の群れ。

数万、いや数十万はあるだろう石盤がまるで、黒い暗雲か一つの巨

大な芋虫のように迫ってきている。

「ちよ、ちよつと凄い数…。これ全部相手にするの!?!」

流石に、動揺する愛美。

(確かに、凄い数だけど…みんなの力を合わせれば、なんとかできるわ。いえ…なんとかしなきゃ!)

法子は、冷静になってみんなに指示する。

「みんな、よく聞いてね。

数は凄いいけど、一つ一つが意志を持つてる訳じゃないわ。

まず、愛美さん。魔法で壁を…属性は炎でも氷でも何でも良いから。

」

「うん。わかった」

早速イメージを始める愛美。

「次に久美たん、愛美さんが作った壁の右側を塞いで。」

「OK。マナ、属性とタイミング決めて、合図して。」

「OK、マスター。属性は氷、”カンバージュ”のあと、二回転でキャストするから」

「了解、マナ。」

属性やタイミングなどを慣れたように話す久美と愛美。

「次に、紗夜さんは左を塞いで。」

「わかりました。」

コクリと小さく頷きながら、返事をする紗夜。

「陽さんには、三人が作った壁からこぼれたのを払い落として。」

「了解。」

陽は、持っている剣の意志を確かめるように一目見て、言葉を返す。

ガタガタ…カンカン…

近づいてくる無数の石盤。

「みんな、戦闘開始よ!」

法子の合図とともに、それぞれ準備に入る。

「みんな準備できたら、合図して!」

愛美は、氷の魔法をイメージしながら、叫ぶように伝える。

陽は左手で攻撃のモーションを確認し、

「いつでもいいぜ！」と気合いを入れながら返事をする。「こちらも完了です。」

陽のあとを追うように返事をする紗夜。久美もあとに続く。

「こつちもOK！」

久美の返事を確認し、愛美はカウントし始める。

「3、2、1、カンバージュ！」

杖の液晶には、“I s p i e w”という文字が映る。

紗夜も弓を持つ手を水平に構え、集中を始める。

愛美が杖を掲げ、小さい円を描く。

久美も注射器銃を構え狙いを定める。

紗夜の弓には光がとまり、弦と矢の輪郭が現れはじめる。

杖が二回目の円を描きはじめると、陽は剣を投げるように構える。

杖が回転を終えて、光を帯び、愛美の音が響く。

「アイスパイウ！」

その声を聞き、久美も引き金を引く。

愛美たちと石盤の群れを分断するように、いくつもの氷の槍がバリケードのように、折り重なりながら壁を作る。

紗夜は狙いを定めその左に矢を放つ。

放たれた矢は六つに分裂し、規則正しく星を描くように石盤の群れ

に向かっていく。

久美によって、氷槍の壁の右に発射された注射器は壁に近づくと割れて、中に入った液体が網のように凍っていく。

左の方では矢を基準点に五芒星を描き魔法陣ができあがる。魔法陣からは氷の粒を氷の壁に吹き付け、着実に壁を左側へ広げてゆく。

法子は、今の状況とイメージを重ね本に込めながら、打開策を探している。

陽は氷壁の上に、剣を投げて停止させて、近寄ってくる石壁を待ち構える。正面に位置する氷のバリケードは愛美の力により、どんどん大きく高くなっていく。

左側では紗夜が作った矢の魔法陣によって、氷のフェンスが伸びている。

右側では久美が次々と、注射器を最初に作った氷のネットに少しずつ右側にずらしながら打ち込み、網目を細かくしながら右に広げてゆく。

カンカンカン…

ガラガラガラ…

無数の石盤たちは、もう氷の壁の近くまで迫っている。

陽の剣が無数の石盤たちに向かっていき、高速で立ち回りながら、群の左右を往復して氷の壁へと追い込んでゆく。

高さ10m、長さ50mを超える氷の壁に阻まれた石盤たちは、進路も退路もふさがれながら、バルティアリスの下にたどり着こうと、氷の壁に何度も打ちつけている。

持久戦になればなるほど、法子たちには不利になる…。

焦る気持ちを抑えながら、集中しバルティアリスの弱点を探していく法子。

（もしかしたら…）

質感や外見はどう見ても石みたいなのだが、ここは想像力が大きく左右される世界。今までの先人観をすべて捨て去り、バルティアリスという物体と、飛んでくる石盤のようなものという分かった事実だけをイメージして、本に込めていく。頭の中に、”カルジドレイル”という言葉が浮かぶ。

その言葉を元に、イメージし、本の知識を導きだしていく。

（あつた…弱点は…）

導きだした答えを叫ぶようにみんなに伝える。

「みんな、弱点は火炎よ！」

「リーダー、了解！」

愛美は返事をする、今までの氷のバリケードのイメージを残しながら、炎の魔法をイメージする。「イメージできたら、”カンバージュ”の代わりに”イクト・カンバージュ”と唱えて！」

急に頭の中に直接、ステラの声が愛美に届く。

（了解、ステラ。）

遅れて紗夜も

「わかりました。法子さん。」  
と返事をする、ルーナが呼びかける。

『紗夜さん。魔法陣の中心に、炎のイメージをした矢を放てば、属性が変わります。』

今の魔法陣を固定のイメージとして、炎の矢を頭に描く。

「OK！法子さん。あたしは剣を振り回すだけだけどね。」  
陽がちよつと皮肉っぽい返事を返すと、

『炎なら使えるよ。』

その皮肉を不満そうに答えるサニア。

（そうなの？）

『あたいは、”太陽”の力を司ってる。氷や水は使えないけど、炎なら得意さ。』

（なるほど！それでどうすれば使えるんだ？）

『感じて…強く想うのさ。太陽の熱と光を。』

（まずは感じればいいんだね？）

陽は、夏の日当たりの暑さと強さをイメージしていく。

『そう…。そんな感じ。それを剣に乗せるんだ。』

（分かった。乗せるんだね。）

陽は、剣に先ほどのイメージを乗せていく。

剣の周りがだんだんと揺らめいていく。

しばらくすると、たちまち火がついた。

（できた！）

『さあ、やるうぜー！』

（ありがとう。サニア…。行くよ！）

## # 12 異界：親子幽閉

一方、あかりと父親である有坂光樹・こうき・は、石盤の中の世界に取り込まれつつあった。

あかりの父親である、有坂光樹・こうき・が目をさましたのは、研究所のソファだった。

（あれは…夢だったのか…！？）

光樹は、オルディアスで起こったことが、断片的にしか思い出せなくなっていた。

静寂の中、突然に電話が鳴り響く。慣れた手つきで、テーブルにある電話の受話器を取ると、

慌てた様子の女性の声が聞こえた。

「大樹総合病院ですが、有坂さんですよね？」

（大樹総合病院！あかりに何かあったのか…！？）

焦る気持ちを抑えて、冷静になるように自分に言い聞かせるようにゆっくりと、返事をする。

「はい。有坂です。娘に何かあったんですか？」

ふと、光樹の頭によぎる記憶…。それは、何らかの影響で娘のあかりが、二週間前から意識不明になっているというものだった。

「たった今、意識が回復されたので…すぐ来て下さい。お母さんももう来てますので。」「わかりました。すぐに行きます。」

喜びと、娘にすぐに逢いたいという気持ちが先走りして、そういうとすぐに受話器を戻し、病院へと急いだ。

戸締まりをして、部屋をカードキーでロックしたときに記憶が浮かぶ。

（そうか…三年前と…）

四年くらい前、妻であり、あかりの母親である、ひかりも大樹総合病院に入院していた。告げられた病名は、原因不明の心臓病。

一年くらいたった、三年前の今日、ひかりの病は、原因不明のまま奇跡的に回復したのである。

(もしかしたら…あかりも…)

光樹は、かすかな希望を胸に、病院へと急いだ。

石盤の中の世界に入った時に刷り込まれた記憶だと気付かずに…。

「あかり…！よかった…。」

母である、ひかりの声でびっくりした、あかりは、きよんとした声で、返事をする。

「お…お母さん…。どうしたの…？」

あかりが大丈夫だとわかった、ひかりは落ち着きを取り戻して、伝える。

「寝たまま…長い間…気を失ってたから、そのまま死んじゃうんじゃないか…心配してたのよ…。」

(そんなに長い間…それに体が…楽になった気がする…。)

あかりは、なんだかわからない違和感を覚えたが…長い間、気を失っていたせいだろうと思いついていた。

ガラガラ…。

「だいぶ…ぐっすり寝てたのね…。今までこんなに寝たことないから…あかりちゃんの体に異常がないか、検査しなくちゃね…。また呼びにくるからね。」

看護婦に言われて、

「うん、わかった。」

と、返事をする。

(なんか違う気がする…。でも、わたしのところに来るのは、いつ

も由美さんだよね…。)

光樹と同様に、記憶を刷り込まれ…違和感を感じながらも、虚構の世界だと気づかない、あかり。

もちろん、法子たちが二人を取り戻すため戦っているとは知るよしもなく…。

### # 13 絶望：消失予兆

石盤の群れの中に、炎をまといながら突っ込んで行く陽の剣。その炎に触れた石盤は砂のように散っていく。

愛美は、持っている杖の液晶に”炎柱昇壁”と文字が浮かぶと、  
「イクト・カンバージス！」  
と唱える。

液晶の文字が変わり、”Orte Frpoew”と表示されている。

「Orte”はオルトって読んでね。入れ替えるって意味だから。

（うん。）

ステアの説明を聞き、

「オルト・フルポエル！」

と唱えると、一つ一つの氷の槍が、炎を巻きながらドリルのように回転を始め、炎の柱に変わってゆく。

炎柱の壁に当たった石盤たちは、剣の炎に当たった時のように、砂のように散っていく。

同時に、紗夜の魔法陣にも炎の矢、久美の氷の網にも注射器が、それぞれあたり炎に包まれていく。

無数に近い石盤も徐々に数が減っていき、10分ほどで跡形もなくなっていた。

法子は安堵しながらも、

「やったわね…。みんなありがとう さあ、二人の入っている壁を

見てみましょう…。」

と一抹の不安を抱えて、指示する。

急いで大きな石盤に駆け寄り寄る法子たち。

「だいぶ…薄くなってるよ！リーダー…。」

動揺を抑えきれずに、言葉にする愛美。

「早く…なんとかしないとですね…。」

表情を曇らせながらも、なんとか冷静さを保つ紗夜。

「法子さん！他に方法はないのか！？」

ストリートになんとか救い出したい想いをぶつける陽。

「のっこ、他に手は見つからないの…？」

状況を把握しつつ、法子に確認する久美。

「ごめん…。いろいろ考えてるけど…見つからないわ…。でも、早

くしないと…教授とあかりちゃんが…。」

焦りと不安を抱えながら、必死に打開策を見つけようとする法子。

久美は法子の言葉を聞いて、ある考えが頭をよぎる。

（そういえば、のっこ…あかりちゃんより、前に教授って…。もし  
かして、まだ…。）

昔の記憶…。

知り合ってしばらくしてから4人が頭をかすめる…。

大学院生だった光樹と、ひかり、法子、久美。

法子とひかりは、光樹に対して、好意を…友達としてでなく、男女

としての感情を抱いていた。

一時は三角関係でのトラブルでひかりと法子は仲違いしたものの…  
光樹はひかりを選び、婚約をかわす。

法子は、

「絶対に幸せにならなかつたら、許さないからね…。」  
と、泣きながら、ひかりに言っていた…。

(ひかりん、あかりちゃんを守っていてね…。)

懐かしさと、あかりちゃんを思う気持ちが混ざり合い、あかりの母親であり、親友であるひかりに思い出がつかぬがる。

久美は、スカートの左のポケットから、御守りを取り出す。御守りを手にして、思い出にかえると、ひかりが、死ぬ直前に言っていた言葉を思い出す。

「久美たん…。もし、のつこが…私のことを思って、光樹さんを…  
…まだ思っているのに、戸惑っていたら…。」

「ひかりん。それって…。」  
「のつこに…御守りの袋をひっくり返して…って伝えて…。」

「わかった…。」  
「私のがのつこにしてあげられるの、もう…これしかないから…。」

(のつこが光樹さんをまだ愛していたら…ってコトだよ…。…！  
？、もしや…。)

久美が何かに気づき、思考が急に現実に戻される。

（ハイプリーステス…愛してる……エンペラー…。  
多分、間違ってる！）

辺りを見渡し、愛美を見つけると…目でこっちに来るようにサインを送る。

（あ、マスターが呼んでる！）

久美のアイコンタクトに気づき、久美に駆け寄り愛美。

久美は愛美が側に来たのを確認すると、小声で話始める。

「ちよつと賭けになるかもだけど…」

「うん。どんな？」

「のつこがハイプリーステスで…あかりちゃんのお父さんがエンペラーだとすると…」

久美のヒントに愛美は少し考える間において、答える。

「もしかして…エンプレスのカードも、リーダーが…ってコト？」

久美は、愛美の予想通りの答えに頷くと、

「のつこね…。二人が閉じ込められてから、あかりちゃんじゃなくて、最初に教授って言うの…。」愛美は久美の言いたい事が何なのか、考えながら答えていく。

「法子さんが…あかりちゃんのお父さんを好きってコト？」

「うん。もしかしたら…ひかりん、つまりあかりちゃんのお母さんが結婚する前からずっとね…。」

「結婚する前から…？」

「一時、三角関係だったの。のつこと、あかりちゃんのお父さん、お母さんは…。」なんとなく、事情が飲めてきた愛美。

「わたしが…リーダーにハツパかけると…？」

「さすが、マナね。話が早いわ。」

「マスターのオーダーは、断れないからね…。」  
と言って、愛美は法子のほうへ向かった。

# 14 熱情：想愛奇跡

法子はまだ、考えを巡らせていた。

そんな法子に、愛美は近づき声をかける。

「法子さん。ちょっといいかな…?」

法子は、愛美の声に思考を遮られ、返事をする。

「あっ…愛美さん…なにかな?」

愛美は、久美に指示されたことを、どう言おうか迷いながら、口に出していく。

「うん。えっと…気付いちやっただけだ…。」

愛美の言葉に、訝しげに答える。

「えっ…気付いたって何を…?」

「あかりちゃんのお父さんのコト…好きなんですよ?」  
なるべく軽く、だけどストレートに問いかける愛美。

「愛美ちゃん…。どうして…?」

突然の問い掛けに、端的な言葉を口にするのがやっとの状態の法子。

「だって…法子さん、必ず…あかりちゃんたちを呼ぶときに、『教授』って先に言うから…。」

「それだけじゃ、わからないでしょ?」

「それだけじゃないわ…。」

遠くから返答が帰ってきて、驚いた二人は、声のした方を振り向く。

「マスター!」

「くみたん!?!」

二人がほぼ同時に久美の名前を口にする。

二人が自分の登場に驚いているのを気にも留めず、

「のっこは、わざと『教授』って呼んでるのよ…。声でわかるわ。付き合い長いし…。」

「わざと…!?!?」

何故、わざとなのか、わからない愛美。

法子は、明らかに困惑の表情を浮かべている。

「のっこ…。ずっと好きだったのよね。光樹さんのコト…。」

「もしかして…。名前を呼ぶと、気持ちを押しさえ切れなくのが、怖くて…。」

愛美は思いついた答えを口に出す。

「…。」

法子は無言のまま、俯いている。そんな法子に、久美は追い討ちをかけるような言葉を口にする。

「のっこが、光樹さんに気持ちを伝えてたら…。」

「マ…マスター…!？」

さすがに、これ以上はかわいそうだと感じ愛美は止めに入る。でも、その行動は逆に、法子にとってはプレッシャーとなつてのしかかる。

「…わ…わたしが…。」

泣き崩れそうな、法子。

そんな法子に久美は

「そうね…。こんな形には、ならなかったかもしれないわね…。」

口では、そう言いながら愛美に対しては、二人にしかわからないような細かいサインを送る。

(大丈夫だから見ていて…って、マスターは何を考えてるのかな…?)

声を押し殺して泣いている法子を見て、大丈夫だとは、とても思えない愛美。静寂の中、法子の押し殺して泣く声だけが周りに響く。

しばらくして、久美が口を開いた。

「のっこ、いい?よく聞いてね…。」

法子は、ゆつくりと頭を上げ、久美を見上げる。それを確認した久美は話を続ける。

「あなたのカードはハイブリーステス。『知識』の力があるのはわかってるわね?」

声には出さず、法子はゆつくりと大きく頷く。

「でも、ここは想うコト……つまり、気持ちや想像が力になるの。」「法子は軽く相づちを打つ。

「のっこの、光樹さんへの想いを……そのまま内にしまっていたら、救えないわ。あかりちゃんたちは……。」

「……教授のこと……でも……。」  
法子は亡くなった、ひかりのことを考えると、どうしても引け目を感ぜずにはいられない。

久美も、法子が引け目を感じているのは解っている。

(今、見てもらうべきね……。持つてると思っけど……。)

「そうよね……。ひかりんに悪いって思ってるよね……?」

「だって……あかりちゃんもいるから……。」  
「やっと言葉を発した法子。」

「ひかりんからの御守りは持つてる?」

「うん……。いつも持ち歩いてるから……。」

久美はその言葉を聞き、安心して話を続ける。

「のっこ、御守りを開けて袋を裏返してみて……。」

「え……?何かあるの……!?!」

普通、御守りを開けることはほとんどない上に、裏返すことに違和感を覚えた法子。

久美は素直に理由を告げる。もちろん久美自体、細かい内容はわからない。

「時がきたら伝えて……ってひかりんが言ったの。のっこへの最後のメッセージ、受け取ってあげて。」

「うん。わかった……。」

と、バッグから御守りを取り出す法子。

御守りの袋を開けて、裏返してみると、何かが入っているように縫い付けてある。

縫い付けている糸は、最初からほどくことが解っているかのような、  
ピッチの広い波縫い。

(こんな細工までして…ひかりんは何を伝えたかったの…。)  
縫い付けてあった布の裏に紙が折りたたんで入っているのを確認し  
て、その紙を開く。

紙には、こう書いてあった。

のっこへ

直接言えなくて、ごめんね…。

でも、どうしても…のっこに伝えたいコトがあったから。

たぶん、これを読んでも時にはわたしはもういないかな…。

もし、のっこが…

まだ光樹さんを好きだったら、光樹さんと一緒になってほしい。

あかりのコトも、のっこなら任せられると思うから…。

光樹さん、真面目だし…わたしのコトを気にして…ずっと独りじゃ  
可哀想だし…。

わたしは、光樹さんという幸せだったから…次はのっこに、わたし  
の分まで幸せになってほしいの…。

(ひかりん…)

法子の瞳から、涙が滲んでゆく。

それを見ていた久美は、

（ひかりんのメッセージ、のっこに伝わったみたいね…。）

法子が読み終わったのを確認し、次の行動を模索する。

（マナもいることだし…何とかなるわね。）

久美はそう確信すると、愛美にサインを送る。

そのサインを確認し、法子に近づく愛美。

（また、発破かけのね。さすがマスター。駒の使い方はうまいわ…。わたしも駒になりきろっ）

もともとノリで行動するのが嫌いじゃない愛美。

それを熟知している久美だからこそ、愛美は素直に指示に従えることが出来るらしい。

「法子さん、あかりちゃんたちのところへもどろっ！」

「ええ、考えてるだけじゃ始まらないわね。戻って色々やってみましょう。」あかりと光樹の閉じこめられた石盤へと急いで戻る三人。

石盤の前に戻ると、すでに陽と紗夜は声をかけたり、光を当てたりと…色々試しているようだ。

「法子さん、助け出す方法は見つかりましたか…？」

紗夜が戻って来た法子に尋ねる。

「いいえ…。紗夜さんたちがやった反応は…？」

「全く反応なしです…。砕けてしまわないように、衝撃を与えることができないので…だいたい方法が限られてるのですが…。」

「法子さんたちは、何か思いつきましたか？」

全員が考えていると、法子の隣にいた愛美が二人だけが聞こえるような小さな声で

「法子さん、光樹さんへの強い想いをぶつけてみたら？」  
と耳打ちする。

一瞬、驚いた法子だが、策がないこの状況でなりふり構ってはいられないと決心し、みんなに伝える。

「みんなは一斉にあかりちゃんを呼んでほしいの。わたしは教授を呼ぶから。」

（みんなには、一斉にあかりちゃんをよんでもらって…あまり反応なければ、私が光樹さんに…。）

みんながそれぞれに頷くと、

「タイミングあわせるのに、私がカウントするわね。」  
と久美。

「3！」

カウントを始めた久美。

「2！」

まわりに緊張が走る。

「1！」

みんなが、声を揃えて出すために、息を整えていく。

「あかりちゃん！」

ほんの一瞬だけ、輪郭が見えたものの、すぐに薄くなってゆく。

（少しだけ…。のつこに賭けるしかないわね…。）

久美はそう思い、法子に声をかける。

「頼んだわよ。」

法子は、一回だけ力強く頷くと、胸に手を当てて息を整える。

そして、

「光樹さん！」

と、力と想いを強く乗せて叫ぶ。

あかりを呼んだ時と同様に、一瞬だけ輪郭が浮かび上がる。

(同じ反応…。それなら…。)

もう一度、息を整える。

自分に言い聞かせるように頷くと、

「光樹さん！ずっと好きだった！！」

と、今まで口に出せなかった想いを乗せて叫ぶ。

しかし、法子の想いを込めた言葉さえも、石盤は同じ反応しか示さなかった…。

みんなが絶望しかけた時、法子は頭に直接聞こえてくる声に耳を傾ける。

『法子さん、ありがとう…。私、思い出しましたわ！愛する力を…。』

『

(イリス…。)

イリスの皇帝に対する気持ちが変わり、法子はイリスに同調する。

『さあ、受け取って…。』

その声を聞くと、光が左手の薬指に集まる。

光が収まると、その指には指輪がはまっていた。

『さあ…愛する人のもとへ、行きましょう！』

(ええ…。)

頷き、石盤に指輪をした左手を握り、かざす。

指輪が光を帯びてゆき、石盤へと光が放たれる。

指輪から放出された光は、石盤へと注がれ少しずつ光を帯びてゆく。

『さあ、行きますよ。』

(ええ…。でもその前に…。)

法子は後ろを振り返り、

「ありがとう……。久美たん。」

と、久美に言った後、

「みんな、絶対に二人とも連れ戻すから！」  
とみんなに伝える。

みんなそれぞれに頷くと、法子は前を向き、石盤の中へ吸い込まれるように入ってしまった。

# 15 虚構：障壁内部

石盤の中に入った途端に光に覆われ、気づいた時はある見覚えのある路地に立っていた法子。

(…ここは、私たちの町…?)

周りを見渡し、一つの答えにたどり着く法子。

(なるほどね…。ここまで再現してみると、確かに錯覚するわね…。) となると、家に行けば、あかりちゃんには会えるわね…。(あかりの家に行こうと向かおうとしたが、考えなおす。

(いまは何時ごろになってるのかしら…?)

まずは、全体の情報を調べるべきだわ…。)

そう決めて、駅周辺に向かう法子。

一方、法子たちがあかりと光樹に声をかけたとき、

一瞬の違和感を感じていた。

(あれっ…? 誰かから呼ばれた気がするんだけど…。)

あかりは、母親のひかりと歩いていると、声をかけられたように振り返る。

しかし、誰もいない。

「どうしたの? あかりちゃん。」

あかりの行動に反応するひかり。

「さっき、誰かに呼ばれた気がするんだけど…。」

ひかりは、辺りを見回して

「誰もいないわよ…? 気のせいよ、行きましよう。」

優しく、安心させようという母親の声。

「うん。」

(でも…知ってる人のような声なんだけど…。)

答えの出ないもどかしさを抱えながら、歩いていくあかり。

研究所にいた光樹も、声を聞いていた。

（誰もいないはずだが…。疲れているのか…？）

ふと、思い返すが、あかり同様に誰だかわからない。

（でも…すごく聞いていた気がする声なのだが…。）

あかりの病状も回復に向かっているし、ひかりも家のことをよくやっている…。

幸せなはずだが、何か大切なものを忘れている気がする光樹。

『昨夜起こった強盗傷害事件で…』

駅前のロータリーにあるデパートの大きなモニターにニュースが流れている。

（今日の朝見たニュースだわ。

だとすると…この時間は、私たちの世界と変わって無いみたいね…。念のために日付も確かめないとね…。）

そう思い、モニターを眺める法子。

しばらくすると、ニュースの後に天気予報が流れる。

『今日、6月14日の天気は…』

（やっぱり、一緒みたいね…。それなら、あかりちゃんの前に光樹さんに会うほうが先みたいね…。）

そもそも、普段なら光樹と一緒に研究所にいるはずの時間だ。

病院か、学校か、自宅のどちらにいるか確定できないあかりを探すよりは、確実だろう。

（問題は、わたしの存在がどう認識されているか…それも、研究所

に行けばわかるわね。」

まだ太陽が南に昇りきっていないから、おそらく10時くらいだろう。

法子は研究所に向かって歩きだした。

研究所に着いて、入口のモニターで自分の名前を検索してみる。

（サイトウ……サカモト……あった。）

モニターには、『シダノリコ』と法子の名前が記されている。

（存在は認識されているわね……。どういう扱いになってるのかしら……。）

管理用のパスワードをタッチパネルで打ちこんで、確認してみる。

（なるほど……あの事故で飛ばされたのは私ってことになってるわけ

ね……。）

パネルの表示では、前日の朝からでないことになっているから、そう推測する法子。

（こっちに入り込んだのが気付かれている可能性もあるわね……。）

とりあえず、光樹のいるであろう実験室へ向かう法子。

# 16 接触：障壁中核

光樹がいるであろうと思われた研究室のドアは、空室の表示がされ、鍵がかかっている。

(いないみたいね…。)

念のため、カードキーでロックを解除して、部屋の中に入る。

部屋は音もなく、非常灯がぼんやり点いているだけだった。

(と、すると…家か、病院かのどちらかね…。)

法子は部屋を出ると、扉をカードキーでロックし直して、出口へ向かった。

(…光樹さんの代わりに私が飛ばされた…違う事象……。)

法子は頭を巡らす。  
(もしかして…都合の言いように…。ということは、病院の可能性は低い…。)

光樹たちの家に向かう法子。

光樹たちの家に向かう途中、何人かとすれ違うが光樹たちの姿はない。

平日の正午前なので、人ごみでわからないということもない。

(2日前まで病院にいたから、まだ家にいると思ったんだけど…。)

ヴァルティアリスの敵陣にいきなりは…ちょっと危険かな…。)

そう思い直し、待ち伏せをしようとする公園に向かう。

しばらくすると、聞き慣れた声がする。

「今日はどうするの?」

「あかりは、何か欲しいものあるかな?元気になったお祝いに何か買ってあげる。」

「えっ…ほんと！？じゃあ…えっと…。」

聞き間違えるはずない声に反応し、気付かれないように視線を向ける。

間違いなく、あかりだった。

そして、その隣にいるのは母親のひかりである。(やっぱり、ひかりんが本体ね…。)

実際には、あかりと同じ病気で死んでいるはずのひかり。

(やっぱり、ひかりんと戦うしかないよね…。)  
法子も、いくら偽物や幻影だとしても、親友と戦わなくてはならないと考えると多少気が引ける。

しかし、この世界に飲み込まれてしまうあかりと、何より愛する光樹を救わなければならない。気を引き締めなおすと、法子は次の行動を考える。

(二人で出掛けたなら、光樹さんは…家にいるか、研究所のどちらかね…。まずは、家にいるか確かめないとね。)

法子は二人が見えないか確認し、あかり達の家に向かう。

白い壁に赤い屋根の二階の家。何処にでもある普通の家。

表札には『有坂』とある。

(本当に、よく出来てるわ…。現実と見分けが付かないのも、無理ないわね…。もちろん、それだけじゃないだろうけど…。)  
感心しつつも、気を抜くわけには行かない。

敷地の中に入り、玄関の前の呼び鈴を鳴らす。

(光樹さんに会えたら、話のつじつまを合わせないとね…)  
と、考えながら光樹を待つ。

しばらくすると、

「どなたですか？」

と光樹から返事があった。

「志田です。教授…。」

「し、志田君…!?!」

と玄関を開けると、

「大丈夫だったか？何処へ、どういう風に飛ばされたんだ？どうやって…。」

矢継ぎ早に質問をする光樹に、

「先生…聞きたいのは分かりますが、落ち着いて下さい…。」  
と、たしなめる法子。

「ああ…すまない。つい興奮してしまったようだ…。」  
ふと、正気をとりもどし詫びる光樹。

(ここじゃ、まずいわね…。いつ帰ってくるかわからないし…。)  
「私も色々とはなしたいんですが、ちょっとここでは説明が難しいので、研究所で話したいんですが…。」  
とヴァルティアリスを気にして、移動しようと誘う法子。

「すぐ行きたいんだが…妻と娘が買い物に行ってるから、連絡取って準備してから行くよ。」

「わかりました。先に研究所に行ってますね。私も話の内容を整理しておきます。では後ほど…。」

と玄関を振り返り、研究所へ向かう法子。

(光樹さんはなんとか話できそうだね。でも…どうやって説明しようかしら…。)

研究所でさえ、もしかしたら情報は筒抜けになっているのかもしれない

ないが、すこしでもヴァルティアリス本体であるひかりから目の届かない場所で説得しようと思う法子。

研究所に着くと、カードキーを差し込み、普段使う研究室に入る。御守りと指輪を確認し、頭の中でイリスに呼びかける。

（イリス、今話せるかしら…？）

『大丈夫ですよ、法子。』

（どう説明すれば、光樹さんは納得するかな…？）

『そうですね。』

イリスの答えを待つ法子に、イリスは思い出したように伝える。

『言い忘れてましたが、あの“本”も使えますよ。』

（そうなの…？状況を知るのにやってみる価値はあるわね…。）

## # 17 困惑：虚構世界

法子が考え始めてしばらくすると、入り口の扉が開いた。光樹は入ると、入り口に近いデスクの椅子に腰掛ける。ここが光樹のいつもの定位置である。

法子は慣れた手付きで、角にある茶箆筒からコーヒードリッパーを出し、コーヒーの粉の瓶を開け、粉をそのままドリッパーへ入れる。いつもやっているので二人分、三人分の量ならどの位かを覚えてしまっている。

コーヒーの瓶をしまうと、カップのセットを2つ出し、給湯器からポットに熱湯を少し入れ、回しながら湯を捨て、もう一度半分くらいまで注ぐ。

そのポットの湯をドリッパーを注ぐ。

ポタポタ…と落ちるコーヒーの音が、静寂な部屋に規則的な音を奏でる。

法子も光樹も、この単調な音が止まるまで、時間が止まったかと思うくらいにじっとしている。

いつも、実験などで大きな音を聞いているので耳をすますために、二人のときはこの音を聞く約束なのだ。

音が止まると、2つのカップに注ぎ、ドリッパーを洗う。

ドリッパーを茶箆筒にしまうと、カップをソーサーに乗せ、光樹のデスクに置く。

「ありがとう。」

と、光樹がカップに手を伸ばし、コーヒーに口をつける。

それを見て、法子は自分のカップをソーサーに乗せ、光樹の隣のスクに置き、椅子に座る。

(いつもと同じことをやっている、ここが異世界だって忘れそうね…。気を付けないと…。)

一呼吸置いて、光樹の方へ向き話し始める。

「まず…教授は、もしこの世界がパラレルワールドだったら、どう思いますか？」

「それは…この世界より別の世界が、現実だったら…って事かい？」

「ええ…。」

「もしや、君は飛ばされた世界で何か見つけたのか…？」

「そうなのは実際にはわかりません。」

教授の意見を聞いて、少しでも分かりやすく話せるといいのですが…。」

「そうか…。私は早く、君の体験した事をききたいのだが…。」

「すみません…。でも、ちゃんと伝える為にも必要なプロセスですから…。」

法子は確信に迫りながらも、少しずつ納得させるように、段階を踏んで会話を進める。

「わかったよ。でも、もしこの世界よりも可能性の高い世界があるなら、この世界はパラレルワールドになる。」

「そうですね。」

「そう過程すると…ここからは、あくまで推測だが…。」

「はい…。」

「すべての世界が、時間軸を中心に軌跡を描くわけだから…逆ベクトルの軌跡の世界に打ち消されるか、『より可能性の高い世界』に引き込まれると思う。」

「なるほど…。」

(さあ、これからね…。)

光樹の推測を聞き、法子は本題への話を切り出す。

「次に、人が『可能性の低い世界』にシフトしてしまったとしたら、どうなると思いますか…?」

「同時時間軸から外れてないが…すべての平行宇宙全体から考えると存在の可能性が低くなるから…」

「シフトした世界が『より可能性の高い世界』に飲み込まれた場合、最悪消失してしまう可能性もあると…?」

「そうか…。その推測も考慮すると、全体的に量子の歪みが起きるから、その分の誤差も考えると…。」

しばらく考え込む光樹。

しばらくして立ちあがると、法子のデスクの奥にあるホワイトボードの前で、まとまりつつある考えを壊さないようにするかのようになり、冷静に、淡々と言葉を紡ぎ、ボードに図を書き込んでいく。

「まず、X軸を時間軸として…」

「この世界の時空間の軌跡をRと仮定する…。」

「この世界は現存しているため、逆ベクトルの時空間がある可能性は低いと思われる。」

「もし、Rのような時空間があるとしたら、Rの時空間は巻き込まれる。」

「時空間から意図的に別の時空間シフトできなければ、人もともに同じ軌跡を辿る。」

法子は光輝の推測を聞いていたが、付け加えるように口を開く。

「同一の時間軸でないとすると、どうなりますか？」

「“時間軸がどういう状態であるか”にもよるが、時間軸がゆがんでいたり、短いスパンでループしているとかかなり不安定と思われる。」

「あと、これも極端な仮定の話ですが…時間ではなく、限定的な空間の場合はどうなりますか？」

「限定的空間…」

「例えば、この町だけ…もしくは特定の人物だけの場合はどうでしょう？」

「その仮定だと…すでにながりの歪みがでていて、いつ臨界…つまり世界が崩壊してもおかしくない。」

「とすると、シフトしてしまった人も一緒に巻き込まれ、消失する」と…。」

「その可能性が高いだろう…。」

「そうなりますか…。」

( そういう仮定になるよね…。この世界は…。 )

返事をしながら、自分の考えと合っていることを確認し、あまり時間が残されていないことを改めて認識した。

話が一区切りついたところで光輝は法子に尋ねる。

「では、君の体験を聞かせてもらえるかな？」

「わかりました。信じられないかもしれませんが…。」

( いよいよ、最終プロットね。 )

自分にも言い聞かせるように、返事をして話し始める。

「まず…私はほかの時空からきました。」

「ほかの時空…！？どういうことだ？」

「端的にいうと、教授も…私とは別のアプローチで、同じ時空からきているはずなんです。」

「なんだって…！？確証や根拠を聞かせてほしい。」

「教授はあの実験以後、遠くへ出かけていますか？」

「あの事故から二日だから…家と研究所、病院以外には行っていない。」

「では、今から私の番号を教えるので、かけてもらえますか？」

「わかった。」

ケータイを取り出してプロフィールをだして光樹に番号を見せる。

光樹はケータイを取り出し、法子がもっているケータイの番号を確認して、かけてみるが何の音もしない。

「番号が間違ってるのでは…？」

光樹は法子に問うと、

「私からかけますから、先ほどの番号を紙に控えておいて下さい。」

光樹はデスクにおいてあるメモとペンを取り、番号を書き写す。

法子はそれを確認すると、

「では、かけますね。」

と光樹がもっているケータイに電話をかける。

しばらくすると、ケータイが鳴りだす。

光樹は番号を確認すると、メモと同じ番号であることに驚く。

「どういうことだ!？」

法子は自分の推測が実証されたことに胸をなで下ろすと、光樹に説明する。

「私は一度だけ、教授のケータイにかけたことがありましたよね？でも、教授からは一度も私のケータイにかけてません。」

「それと、今の事象とは？」

光樹は釈然としないものの、話の続きを催促するように言葉を返す。

「この世界は…教授とあかりちゃんの記事をもとに、ある者の意志が邪魔な記憶を削除して作った世界なんです…。」

「ですから…教授のケータイは一度も私のケータイにはかけていな

かったので繋がりません。

ですが、私のケータイから教授のケータイにはかけたことがあるから繋がります。」

「そんなことが…。もしそうならば、その意志とは何なんだ？」

「“ヴァルテイアリス”…絶対悲哀障壁…。」

「ヴァルテイアリス…？」

「はい。もともと、無意識下の悲しみから離れる為の障壁です。それが耐えきれず、歪んでしまったのでしよう…。」

「わたしは、無意識の内に何かに悲しんでいると？」

「妻のひかりさんです。」

「何をバカな事を言っているんだ。ひかりは生きているじゃないか！」

「忘れてしまいましたか？あの日の事を…。」

「あの日…？いつのことだ…？」

全く覚えがない光樹は、法子に尋ねるように問う。

（やっぱりね…。でも、私にはまだ手があるわ…。）

「ひかりさんに会えば、わかります。」

「ひかりに…？どういうことだ…？」

困惑する光樹。他の人ならともかく、研究の片腕を担っている法子の話なので、容易には信じ難いが全く偽りともいえない。

やがて、光樹の重い口が開く。

「会えば、わかるんだな？」

その気持ちを受けて、さらに法子の意思は固まる。強く頷き、答える。

「はい。」

（さあ、なんとしても光樹さんも、あかりちゃんも絶対に帰すからね…。）

心にそう言い聞かせ、勝利の意思を強く持つ法子だった。

## # 18 循環：切除時空

一緒に研究所を出た時には、夜10時を回っていた。

「あかりもいることだし、今日はこれで…。」

「そうですね…。」

「明日、昼と一緒に家に来て会えればいいね？」

「はい。」

本来なら急ぎたいところだが、焦って光樹からの信用を損なうのと、ヴァルティアリスだと思われるひかりがどんな行動を取るかわからない状況では、軽率に動く訳にはいかなかった。

家に帰ると、今日のことを箇条書きに手帳に書き込む。

(さて…明日が勝負ね。)

シャワーを浴びて、部屋着に着替え、ベッドに入ると、疲れていたのか、すぐに寝付いた法子。

朝起きると、

ラジオをかける。

『おはようございます 今日6月14日、今日も1日頑張りましょうね…』

いつも、聞いているラジオのパーソナリティの声を聞きながら、研究所に行く支度をする。

トースターを用意し、棚からパンと、冷蔵庫から作り置きしてある鶏肉と野菜のマリネをテーブルに出し、テレビを付ける。

『昨夜起こった強盗傷害事件で…』

(…なんか、前に聞いたような…?)

研究所に着いて、カードキーを差し込み、光樹がいるのをモニターで検索し、確認する。

(もう来ているみたいね。)

いつもの研究室に入り、光樹を見つけ挨拶する。

「おはようございます。」

光樹はデスクで何かの研究を紙にまとめているらしく、法子の方は向かずに、

「おはよう。」  
と返してきた。

法子は光樹のデスクの隣にある、自分のデスクに座り、手帳を開く。

(今日の予定は…。…!?)

今日は6月14日、なのに手帳にはすでに6月14日のことが書かれている。

(ちょっと待って…。)

法子は、自分の記憶を手帳を頼りに思い出してゆく。

(そうか!ここは現実じゃなかったんだわ…。ヴァルティアリスに作られた虚構の世界…。)

まさか、自分のメモを取る習慣が自分をこんな形で救うとは思って

も見なかった法子。

（ということは、時間軸もループしてるのね…。）  
相手優位のフィールドで、しかも時間がループしているため、限られた時間の中で、なんとか打開策を立てなくてはならない。

（私と、私の持って来た物は影響を受けていないみたいだから…。）

（昨日とは、始まりが違うけど…。今日の昼に会う約束をとらないといけないわね。）

光樹は昨日（だった今日）の夜のことは当然覚えているはずがない。（それに状況を話すより、ヴァルティアリスに会ったほうが早いかも…。）

昼前は光樹が家にいたことを考えると…。  
法子は光樹に声をかける。

「教授は今日は昼前に一度、家に戻りますか？」

「うむ。でも、志田君、よく分かったな？」

「あかりちゃんと、ひかりさんは元気？」

「うむ。今は二人とも元気だよ。」

「久しぶりに顔見たいわ。」

「そうだな。今日出かけると言っていたから、すれ違いになるかもしれないが…。」

「私の家も、教授の家の先ですし。今日はまた夕方、研究室に戻ればいいですよね。」

「ああ、そうだったな。では、準備して出ようか。」  
帰り支度をする光樹。

（次にできるかやってみよう。）

法子も、机にあったメモと、ボールペンを取り出しバッグに入れる。

「志田君、いいかね？」

「ええ。」

二人で研究室を出て、光樹がカードキーを通す。

法子はカードキーを通し、ロックをかけた。

「では、行こうか。」

「はい。」

二人して、あかりの家に向かう光樹と法子。

（そういえば、光樹さんと一緒に、この道を歩くのは久しぶりね…。）  
そう思いながら、光樹の少し後ろを歩く法子。

しばらく歩くと、公園の横を抜けて、光樹の家に着した。光樹はインターフォンを押したが、一分経っても反応がなく、もう一度押す。

反応がないのを確認すると、法子の方を向き、  
「買い物かどこかへ出かけているようだ。すまないが、またの機会に…。」

（仕方ないわね…。）

「わかりました。」

会いたい本人がいないのでは、どうにもならないので、承諾する法子。

「では、夕方に。」

「そうだな。」

法子は光樹に、夕方に研究所に戻ることを確認すると、自宅に向かって歩き始めた。

（さて…どうしようかしら。）

家に帰って資料を集めるか、どこかに行って情報を探るか、迷う法子だったが、ふと思いつく。

（とりあえず、研究所に戻ってみよう。）

研究所に着くと、カードキーを差し込み、普段使う研究室に入る。御守りと指輪を確認し、頭の中でイリスに呼びかける。

(イリス、今話せるかしら…?)

『大丈夫ですよ、法子。』

(どう説明すれば、光樹さんは納得するかな…?)

『そうですね…。』

イリスの答えを待つ法子に、イリスは思い出したように伝える。

『言い忘れてましたが、あの“本”も使えますよ。』

(そうなの…? 状況を知るのにやってみる価値はあるわね…。)

法子が考え始めてしばらくすると、入り口の扉が開いた。

光樹は入ると、入り口に近いデスクの椅子に腰掛ける。ここが光樹のいつもの定位置である。

法子は慣れた手付きで、角にある茶箆筒からコーヒードリッパーを出し、コーヒーの粉の瓶を開け、粉をそのままドリッパーへ入れる。いつもやっているのので二人分、三人分の量ならどの位かを覚えてしまっている。

コーヒーの瓶をしまうと、カップのセットを2つ出し、給湯器からポットに熱湯を少し入れ、回しながら湯を捨て、もう一度半分くらいまで注ぐ。

そのポットの湯をドリッパーを注ぐ。

ポタポタ…と落ちるコーヒーの音が、静寂な部屋に規則的な音を奏でる。

法子も光樹も、この単調な音が止まるまで、時間が止まったかと思うくらいにじっとしている。

いつも、実験などで大きな音を聞いているので耳をすますために、二人のときはこの音を聞く約束なのだ。

音が止まると、2つのカップに注ぎ、ドリッパーを洗う。

ドリッパーを茶筌筒にしまうと、カップをソーサーに乗せ、光樹のデスクに置く。

「ありがとう。」

と、光樹がカップに手を伸ばし、コーヒーに口をつける。

それを見て、法子は自分のカップをソーサーに乗せ、光樹の隣のデスクに置き、椅子に座る。

(いつもと同じことをやっている、ここが異世界だって忘れそうね…。気を付けないと…。)

一呼吸置いて、光樹の方へ向き話し始める。

「まず…教授は、もしこの世界がパラレルワールドだったら、どう思いますか？」

「それは…この世界より別の世界が、現実だったら…って事かい？」

「ええ…。」

「もしや、君は飛ばされた世界で何か見つけたのか…？」

「そうなのは実際にはわかりません。」

教授の意見を聞いて、少しでも分かりやすく話せるといいのです  
が…。」

「そうか…。私は早く、君の体験した事をききたいのだが…。」

「すみません…。でも、ちゃんと伝える為にも必要なプロセスです  
から…。」

法子は確信に迫りながらも、少しづつ納得させるように、段階を踏  
んで会話を進める。

「わかったよ。でも、もしこの世界よりも可能性の高い世界がある  
なら、この世界はパラレルワールドになる。」

「そうですね。」

「そう過程すると…ここからは、あくまで推測だが…」  
「はい…。」

「すべての世界が、時間軸を中心に軌跡を描くわけだから…逆ベクトルの軌跡の世界に打ち消されるか、『より可能性の高い世界』に引き込まれると思う。」  
「なるほど…。」

( さあ、これからね…。 )

光樹の推測を聞き、法子は本題への話を切り出す。

「次に、人が『可能性の低い世界』にシフトしてしまったとしたら、どうなると思いますか…?」

「同時時間軸上から外れてないが…すべての平行宇宙全体から考えると存在の可能性が低くなるから…」

「シフトした世界が『より可能性の高い世界』に飲み込まれた場合、最悪消失してしまう可能性もあると…?」

「そうか…。その推測も考慮すると、全体的に量子の歪みが生じるから、その分の誤差も考えると…。」  
しばらく考え込む光樹。

しばらくして立ちあがると、法子のデスクの奥にあるホワイトボードの前で、まとまりつつある考えを壊さないようにするかのように、冷静に、淡々と言葉を紡ぎ、ボードに図を書き込んでいく。

「まず、X軸を時間軸として…」

「この世界の時空間の軌跡をRと仮定する…。」

「この世界は現存しているため、逆ベクトルの時空間がある可能性は低いと思われる。」

「もし、Rのような時空間があるとしたら、Rの時空間は巻き込

まれる。」

「時空間から意図的に別の時空間シフトできなければ、人もともに同じ軌跡を辿る。」

法子は光輝の推測を聞いていたが、付け加えるように口を開く。

「同一の時間軸でないとすると、どうなりますか？」

「“時間軸がどういう状態であるか”にもよるが、時間軸がゆがんでいたり、短いスパンでループしているとかかなり不安定と思われる。」

「あと、これも極端な仮定の話ですが…時間ではなく、限定的な空間の場合はどうなりますか？」

「限定的空間…」

「例えば、この町だけ…もしくは特定の人物だけの場合はどうでしょう？」

「その仮定だと…すでにながりの歪みがでていて、いつ臨界…つまり世界が崩壊してもおかしくない。」

「とすると、シフトしてしまった人も一緒に巻き込まれ、消失すると…。」

「その可能性が高いだろう。」

「そうなりますか…。」

(そういう仮定になるよね…。この世界は…。)

返事をしながら、自分の考えと合っていることを確認し、あまり時間が残されていないことを改めて認識した。

話が一区切りついたところで光輝は法子に尋ねる。

「では、君の体験を聞かせてもらえるかな？」

「わかりました。信じられないかもしれませんが…。」

(いよいよ、最終プロットね。)

自分にも言い聞かせるように、返事をして話し始める。

「まず…私はほかの時空からきました。」

「ほかの時空…！？どういうことだ？」

「端的にいうと、教授も…私とは別のアプローチで、同じ時空からきているはずなんです。」

「なんだって…！？確証や根拠を聞かせてほしい。」

「教授はあの実験以後、遠くへ出かけていますか？」

「あの事故から二日だから…家と研究所、病院以外には行っていない。」

「では、今から私の番号を教えるので、かけてもらえますか？」

「わかった。」

ケータイを取り出してプロフィールをだして光樹に番号を見せる。

光樹はケータイを取り出し、法子がもっているケータイの番号を確認して、かけてみるが何の音もしない。

「番号が間違ってるのでは…？」

光樹は法子に問うと、

「私からかけますから、先ほどの番号を紙に控えておいて下さい。」

光樹はデスクにおいてあるメモとペンを取り、番号を書き写す。

法子はそれを確認すると、

「では、かけますね。」

と光樹がもっているケータイに電話をかける。

しばらくすると、ケータイが鳴りだす。

光樹は番号を確認すると、メモと同じ番号であることに驚く。

「どういうことだ!？」

法子は自分の推測が実証されたことに胸をなで下ろすと、光樹に説明する。

「私は一度だけ、教授のケータイにかけたことがありましたよね？でも、教授からは一度も私のケータイにかけてません。」

「それと、今の事象とは？」

光樹は釈然としないものの、話の続きを催促するように言葉を返す。  
「この世界は…教授とあかりちゃん記憶をもとに、ある者の意志が邪魔な記憶を削除して作った世界なんです…。」

「ですから…教授のケータイは一度も私のケータイにはかけていなかったなので繋がりません。」

ですが、私のケータイから教授のケータイにはかけたことがあるから繋がります。」

「そんなことが…。もしそうならば、その意志とは何なんだ？」

「“ヴァルティアリス”…絶対悲哀障壁…。」

「ヴァルティアリス…？」

「はい。もともと、無意識下の悲しみから離れる為の障壁です。それが耐えきれず、歪んでしまったのでしよう…。」

「わたしは、無意識の内に何かに悲しんでいると？」

「妻のひかりさんです。」

「何をバカな事を言っているんだ。ひかりは生きているじゃないか！」

「忘れてしまいましたか？あの日の事を…。」

「あの日…？いつのことだ…？」

全く覚えがない光樹は、法子に尋ねるように問う。

（やっぱり同じね…。でも、まだ可能性があるわ…。）

「ひかりさんに会えば、わかります。」

「ひかりに…？どういうことだ…？」

困惑する光樹。他の人ならともかく、研究の片腕を担っている法子の話なので、容易には信じ難いが全く偽りともいえない。

やがて、光樹の重い口が開く。

「会えば、わかるんだな？」

その気持ちを受けて、さらに法子の意思は固まる。強く頷き、答える。

「はい。」

（絶対に光樹さんも、あかりちゃんも帰すからね…。）  
心にそう言い聞かせ、勝利の意思を強く持つ法子だった。

# 19 光明：閉塞打開

一緒に研究所を出た時には、夜10時を回っていた。

「あかりもいることだし、今日はこれで…。」

「そうですね…。」

「明日、昼と一緒に家に来て会えればいいね？」

「はい。」

本来なら急ぎたいところだが、焦って光樹からの信用を損なうのと、ヴァルティアリスだと思われるひかりがどんな行動を取るかわからない状況では、軽率に動く訳にはいかなかった。

(もしかしたら変わるかも…。)

法子は、思いついたことを実行するべく光樹に声をかける。

「教授、ちよつと待って下さいね…。」

「どうしたんだ？」

「手帳、今持っていますか？」

「ああ。持っているが…。」

「明日、来たときに見てくれれば、先ほどの話の証明になるかもしれないので…。」

法子は、そう言いながらケータイの時間を確認して、光樹にも見せる。

「今、6月14日の22:19ですよね。」

と伝えながら、

『6/14 22:19

明日の昼に、家で』

とメモに書き込み、二つ折りにし、光樹の手帳のポケットに入れる。

「明日の昼までは見たり、抜いたりしないでくださいね。証明できなくなるかもしれないので…。」

法子は動かさないように念を押すと、光樹は訝しげながらも「わかった。」と承諾し、鞆にしまい歩き始めた。

家に帰ると、今日のことを箇条書きに手帳に書き込む。

(6/14・2と…。さて、次が勝負ね…。)

シャワーを浴びて、部屋着に着替え、ベッドに入ると、疲れていたのか、すぐに寝付いた法子。

朝起きると、ラジオをかける。

『おはようございます 今日6月14日、今日も1日頑張りましょうね…』

いつも、聞いているラジオのパーソナリティの声を聞きながら、研究所に行く支度をする。

トースターを用意し、棚からパンと、冷蔵庫から作り置きしてある鶏肉と野菜のマリネをテーブルに出し、テレビを付ける。

『昨夜起こった強盗傷害事件で…』

(…なんか、前に聞いたような…?)

研究所に着いて、カードキーを差し込み、光樹がいるのをモニターで検索し、確認する。

(もう来ているみたいね。)

いつもの研究室に入り、光樹を見つけ挨拶する。

「おはようございます。」

光樹はデスクで何かの研究を紙にまとめているらしく、法子の方は向かずに、

「おはよう。」

と返してきた。

法子は光樹のデスクの隣にある、自分のデスクに座り、手帳を開く。

(今日の予定は…。…そうだったわ！)

今日は6月14日、なのに手帳にはすでに6月14日のことが書かれ、さらに6/14-2として二回目についても書かれている。

(今日で三回目なのね…。)

法子は、自分の記憶を手帳を頼りに思い出してゆく。

(今回でヴァルティアリスにあえなくても、光樹さんを説得できれば…。でも、ここはヴァルティアリスに作られた虚構の世界…。どう出てくるかわからないわ…。)

自分のメモを取る習慣を最大限に利用し、なんとか脱出の糸口を掴もうとする法子。

(昨日とは、始まりが違うけど…。今日の昼に会う約束をとらないといけないわね。)

光樹は昨日(だった今日)の夜のことは当然覚えているはずがない。(それに状況を話すより、ヴァルティアリスに会ったほうが早いかも…。)

昼前は光樹が家にいたことを考えると…。

法子は光樹に声をかける。

「教授は今日は昼前に一度、家に戻りますか？」

「うむ。でも、志田君、よく分かったな？」

（光樹さんは覚えていないはずないから…。昼会えるか聞いてみないと…。）

「ああ。そのつもりだが…。」

光樹は一瞬、奇妙に感じたが返事を返す。

「あかりちゃんと、ひかりさんは元気？」

「うむ。今は二人とも元気だよ。」

「久しぶりに顔見たいわ。」

「そうだな。今日出かけると言っていたから、すれ違いになるかもしれないが…。」

「私の家も、教授の家の先ですし。今日はまた夕方、研究室に戻ればいいですよ。」

「ああ、そうだったな。では、準備して出ようか。」  
帰り支度をする光樹。

（やっぱり…ここまででは成功ね。）

法子は、バッグにメモとボールペンが入っていることを確認した。

「志田君、いいかね？」

「ええ。」

二人で研究室を出て、光樹がカードキーを通す。

法子はカードキーを通し、ロックをかけた。

「では、行こうか。」

「はい。」

二人して、あかりの家に向かう光樹と法子。

（もう三回目なのね…。少しでも変えていかないと…。）

そう思いながら、光樹の少し後ろを歩く法子。

しばらく歩くと、公園の横を抜けて、光樹の家に到着した。光樹はスマートフォンを押したが、一分経っても反応がなく、もう一度押す。

反応がないのを確認すると、法子の方を向き、

「買い物かどこかへ出かけているようだ。すまないが、またの機会に…。」

( やっぱり…そうよね… )

「はい。その前に、確認したいんですが…。」

「何を確認するんだ？」

「教授の手帳を見せてもらっていいですか？」

「ああ…でも何故だ…？」

光樹は釈然としないが、法子に手帳を渡す。

受け取った法子は手帳の内ポケットを確認する。(よし!あったわ…。)

光樹にも見せるように紙を取り出す。

「何故、そんなところに…？」

光樹は困惑しながら、法子に尋ねる。

「教授…。多分、困惑してると思いますが…。問題なのは、メモの中身です。」

法子はメモの内容を確認すると、光樹に見せる。

そこには、

『 6 / 1 4    2 2 : 1 9

明日の昼に、家で』と書き込まれている。

「 6月14日の22:19に…!?!?」

「教授、このメモの意味がわかりますか…?」

「ああ…。内容は、まだ来ていないはずの今日の夜に書かれたメモ

ということになる…。」

（次はケータイを取り出して…。）

法子は携帯電話を手にとると、前回と同じように光樹に見せながら、「そうです…。今は6月14日の12:49です。でも、このメモは22:19と書かれています。」「

しばらく、考えた光樹は重たい口を開き、

「…君は何か知っているようだね。とりあえず、上がって話そう…。」

「

はい。」「

（成功したわ。まずは、一歩前進ね…。）

法子は、光樹とともに家に行くと、靴を脱ぎ、端に揃える。

「久しぶりですね…。家に行くと…。」「

「そうだな…。」「

玄関の先にリビングがあり、ソファとテーブルが中央に佇んでいる。

法子は懐かしさのあまり立ったまま呟く。

「あまり、変わってないから…懐かしいですね…。」「

光樹は、

「準備するから、座っていてくれ。」「

というと、自分の部屋へと向かう。

（多分…スケッチブックとペンを持ってくるのね…。）

光樹はホワイトボードや黒板がない場所で講義する場合、スケッチブックを代わりに書きながらまとめていく。

それを知っている法子は、座るとバッグから手帳を取り出す。

開くと6/14の二回目までの内容を確認して、話す内容を組み立てていく。

光樹はリビングに戻ると、スケッチブックとペンを置き、

「麦茶でいいかね?」「

と法子に尋ねる。

「はい。」

法子は頷くと、光樹はキッチンカウンターへグラスと麦茶を用意しに行く。

光樹が麦茶を持って帰ってくると、テーブルに置いて席につく。

光樹は一息つくつと、話を始めるように切り出す。

「では、話してくれないか？」

「わかりました。」

法子は頷きながら、返事をする話し始めた。

「まず…教授は、もしこの世界がパラレルワールドだったら、どう思いますか？」

「それは…この世界より別の世界が、現実だったら…って事かい？」

「ええ…。」

「もしや、君は飛ばされた世界で何か見つけたのか…？」

「そうなのは実際にはわかりません。」

教授の意見を聞いて、少しでも分かりやすく話せるといいのです  
が…。」

「そうか…。私は早く、君の体験した事をききたいのだが…。」

「すみません…。でも、ちゃんと伝える為にも必要なプロセスです  
から…。」

法子は確信に迫りながらも、少しづつ納得させるように、段階を踏  
んで会話を進める。

「わかったよ。でも、もしこの世界よりも可能性の高い世界がある  
なら、この世界はパラレルワールドになる。」

「そうですね。」

「そう過程すると…ここからは、あくまで推測だが…。」

「はい…。」

「すべての世界が、時間軸を中心に軌跡を描くわけだから…逆ベク

トルの軌跡の世界に打ち消されるか、『より可能性の高い世界』に引き込まれると思う。」  
「なるほど…。」

(さあ、これからね…。)

光樹の推測を聞き、法子は本題への話を切り出す。

「次に、人が『可能性の低い世界』にシフトしてしまったとしたら、どうなると思いますか…?」

「同時軸上から外れてないが…すべての平行宇宙全体から考えると存在の可能性が低くなるから…」

「シフトした世界が『より可能性の高い世界』に飲み込まれた場合、最悪消失してしまう可能性もあると…?」

「そうか…。その推測も考慮すると、全体的に量子の歪みが起きるから、その分の誤差も考えると…。」  
「しばらく考え込む光樹。」

しばらくしてスケッチブックとペンを取り出すと、まとまりつつある考えを壊さないようにするかのようになり、冷静に、淡々と言葉を紡ぎ、スケッチブックに図を書き込んでいく。

「まず、X軸を時間軸として…」

「この世界の時空間の軌跡をRと仮定する…。」

「この世界は現存しているため、逆ベクトルの時空間がある可能性は低いと思われる。」

「もし、Rのような時空間があるとしたら、Rの時空間は巻き込まれる。」

「時空間から意図的に別の時空間シフトできなければ、人もともに同じ軌跡を辿る。」

法子は光輝の推測を聞いていたが、付け加えるように口を開く。

「同一の時間軸でないとすると、どうなりますか？」

「“時間軸がどういう状態であるか”にもよるが、時間軸がゆがんでいたり、短いスパンでループしているとかかなり不安定と思われる。」

「あと、これも極端な仮定の話ですが…時間ではなく、限定的な空間の場合はどうなりますか？」

「限定的空間…」

「例えば、この町だけ…もしくは特定の人物だけの場合はどうでしょう？」

「その仮定だと…すでにかかなりの歪みがでていて、いつ臨界…つまり世界が崩壊してもおかしくない。」

「とすると、シフトしてしまった人も一緒に巻き込まれ、消失する」と…。」

「その可能性が高いだろう…。」

「そうなりますか…。」

(そういう仮定になるよね…。この世界は…。)

返事をしながら、自分の考えと合っていることを確認し、あまり時間が残されていないことを改めて認識した。

光樹は急かすように法子を促す。

「次は君が話す番だよ。さあ、話してくれないか？」

「わかりました。手帳とあのメモを出しておいて下さい。」

法子は光樹にそう伝えると、自分の手帳を取り出す。

光樹が手帳をテーブルの上に置いたのを見て、話を再開する。

「まず、メモですが…あれは間違いなく今日の夜書かれたものです。」

「と、いうと…。」

法子は自分の手帳を見せて、伝える。

「この世界は、時間が切り取られてループしているんです。」

「限定的な時間が循環している…?」  
「私の手帳に、6 / 1 4 … 6 / 1 4 - 2 … っ、入っていますよね。現実の世界も含めて、三回目の6 / 1 4 なんです。」  
「…ここは現実の世界ではないと…?」  
「はい。何者かの意志によって作られた限定的な世界…。」  
「限定的…。限定的なのは時間だけなのか?」  
「教授はこの2、3日でこの町から出ましたか?」  
「いや。出てはいないが…。」  
「多分、この世界にはこの町以外には無いはずです…。」  
「どういうことだ…!?!?」  
「教授やあかりちゃんの行動範囲全てを模倣するには、相当の負荷がかかるでしょう。だから、限定的な時空間にしたのではないかと…。」  
「…信じられないが、事象はその可能性が高いようだ…。しかし、まるで…君には原因がわかってるように聞こえるのだが…。」  
「はい…。教授も、あかりちゃんも、この世界に閉じこめられたんです。」  
「何者かに、この世界に連れて来られたというのか…?」  
「そうです。」  
「…君は知っているのか?」  
「悲哀障壁、ヴァルティアリス…。」  
「…なんだ、それは?」  
「誰もが持つ、寂しさや悲しみに拒絶反応を起こす作用が具現化したもののように…。」  
「君は、私とあかりが、何かに悲しんでいると…?」  
「ええ…。ひかりさんです。」  
「…。ここが現実世界でなく、現実にはひかりは死んでいる…?」  
「辛い気持ちはわかりますが…。そうなります…。」  
「ひかりがこの世界を作ったのなら…私たち親子はここにいていいかと思わないか…?」

「いいえ…。この世界は、ひかりさんが作ったものではありません。」「では、どういふことなんだ…!？」

「まず、この世界は教授とあかりちゃんの記憶で作られたものです。」

「私たち親子の記憶が…。」

「原因はヴァルティアリスですが…おそらく、世界の中心軸はひかりさんでしょう…。」

「どうしてそう思う？」

「教授やあかりちゃんなら、ひかりさんを傷つけることはありませんから…。」

それに、ひかりさんなら…こんな形で教授たちを束縛しないでしょうから…。」

「信じられないが…。」

「ええ…。現実よりも理想的な世界ですからね…。」

「ここが、本当に現実世界ではないんだな…?」

「はい…。それは間違いないです。信じられないなら、もう一つ実証しましょう…。」

法子は手帳から、2枚の写真を取り出し、光樹に渡す。

「これは…!？」

光樹は1枚の写真を見て、驚きながら尋ねる。

「忘れていましたか…?ひかりさんと、病院でのあかりちゃんの担当の久美さんは、親友だったんですよ。」「

1枚目の写真は、2年前に3人で取った写真だ。

久美を真ん中に、左にひかり、右に法子が映っている。

「…あかりの担当は違う名前だった気が…。」

「この世界はそうでしょうね…。」

久美さんは、現実世界にいます。あかりちゃんの友達になってくれた陽さん、紗夜さん、愛美さんと一緒に…。」

「聞き覚えがある名だ…。詳しく思い出せないが…。」

「ええ…。教授やあかりちゃんが覚えていたら、この世界は不安定

になりますから、忘却させたのでしょ…。

タロットをあかりちゃんに教えたのは、愛美さんで、その師が久美さんですからね。」

光樹の表情が変わり、困惑の霧が晴れたように、明るくなり口を開く。

「ああ、あの子か！思い出した…。あの高校生たちの1人だったな？」

「そうです。この子たちでしょう？」

2枚目には、病院での一枚。

あかりのベッドに、ベッドに座っているあかりを陽、紗夜、愛美の3人が囲んでいる。

久美が、ほとんど病院通いで友達のいないあかりに友達ができたとの報告を、手紙とともに添えて法子に送ったものだ。

「うむ。確かにおかしい…。君の言ったのは間違いないようだ…。」

「解っていたただけたようですね！」

法子も不安の1つがとれ、表情も明るくなっていた。

「しかし、そうだとすると…私はどうすればいい…？」  
光樹は、状況は解ったものの対応を考えかねている。

「そうですね…。まず、あかりちゃんをこちらのほうに引きつけな  
いといけないですね…。」

「…そうだな。もしかしたら、戦うことになるのか…？」  
そう尋ねたあと、しばらく沈黙に包まれる。

（私だって、戦いたくないけど…おそらく、間違いないわね…。）  
法子は一息つくくと、意を決して光樹に告げる。

「ええ…この世界の核・コア…になっているのであれば、おそらく  
避けられません…。」

そして、沈黙…。  
先ほどと同じくらいの時間が経つと、今度は光樹が沈黙を破った。

「そうか…。」  
しばらくの沈黙のあと、再び光樹が口を開く。

「私はわかったからいいが…あかりにはどう説明するんだ…？」

「それは、多分大丈夫です。ちゃんと説明し、気づいてくれれば、  
わかるはずです。ただ、今は学校も休んでいますし、ほとんどの時  
間を一緒に過ごしているはずなので…何か手を打つ必要があります  
ね。」

「研究所に連れて行くのはどうだろうか？」

「急に不自然ことをしたら、怪しまれます…。それに、向こう側に  
作った起因がある世界ですから…。」

「どこにいても感づかれる可能性があるのか…。」  
「いい考えがまとまらず、話が止まる。」

（どこにいても…ということとは…。）  
法子は考えを導くと、

「このまま、帰って来るのを待たせてもらっていいですか？」

「構わないが…。あかりはどうする？」

光樹は困惑しながら尋ねる。

「考えはあります…。でもここでは言えません…。」

「そうか…。」

光樹は納得はしていないが、法子のほうに現状を把握しているため相手が話せないと言う以上、聞かないことにした。

(6月14日だから…。この時は、あかりちゃんに会ったのはだいぶ前になるはずよね…。そうなら、この手でいけるはずだけど…。)(  
法子は、光樹に

「ちよつと不思議なことがおきますが、あまり驚かないで下さいね。」

と伝えると、イリスに呼びかける。

(本を出すから、サポートお願い！)

『わかったわ。』

とイリスから返事が返ってきたのを確認し、意識を集中する。しばらくすると、法子の両手に本が浮かび上がってくる。

(ここまでは順調ね。)

光樹は、本と法子を往復するように目を上下させている。

法子は、本を眺めたまま、意識を集中する。

(必要なのは、これと…。あれと…)

『私は、このキーワードを関連付けすればいいのね？』

(ええ。これでうまく行けば、導けるはずだから…。)

『わかったわ。』

(これで…。終わり！)

意識の中で、イリスに伝えると

『繋げかたはこれでいいかしら？』

と、イメージを渡してくる。

法子は確認すると、

『OK。これで固めるわ。』  
と本に綴じるイメージをする。

一通り終わると、イリスに感謝の言葉を送る。

(イリス、ありがとう。。。)

『どういたしまして。』

法子は、本から目を外すと、光樹が尋ねる。

「まるで…手品みたいだが…。その本は？」

「本の名前は…。」

『トールの書よ、法子。』

(ありがとう。)

「トールの書と言って、イメージした知識を引き出すことができる本です。」

「…それで、何を調べるんだ？」

「あかりちゃんと私たちは、カード…タロットに似た不思議な札によつて繋がっています。」

「私は持っていないが…。」

「教授のカードは、まだ解放されてないんです…。」

「解放…？」

「はい。解放されることによつて、それぞれ能力を使うことが出来ます。私のカードは女教皇・ハイプリステス・、先ほどの本で知識を得るのが能力です。」

「そうか…。半信半疑だが、状況的に信じるしかないようだな…。」

「ちなみに…カードが解放されると、サポートをしてくれる意識みたいなものがあるようです。」

「意識…？」

「ちよつと待ってて下さい。お見せします…。」

(イリス、私の身体は動かせる?)

『出来ないことはないですが、法子に負担をかけますよ。』

(どのくらいなら、耐えられそう?)

『1、2分なら…そんなに負担はかからないと思います。』

(なら、お願い。)

『わかりました。少しの間、耐えてくださいね。もしつらくなったら言っして下さい。』

(わかったわ。)

『では、始めます。』

(え…す、吸い込まれる!?)

『ちょっとだけ、我慢してください。もうすぐこちらに着きます。』  
法子が着いたのは、真っ白な丸い空間。

その中間に、白いローブを着た女性がいる。

(綺麗な人…。イリスさんかな?)

背は165cmくらいだろうか。純白のローブに、肩まである漆黒の髪。肌は白く、黒い瞳は、凜とした意志がうかがえる。

『そうですよ。法子。』

法子は、イリスに近づき

「改めて、初めまして。これからよろしく。」  
と挨拶し、手を伸ばす。

「初めまして。こちらこそ。」  
とイリスは法子と握手する。

「では、少しだけ法子の身体、お借りします。」

「ええ。光樹さんを納得させてきてね。」

「わかりました。」

イリスはそういうと、吸い込まれるように上に昇ってゆく。

(ちよつと、痛いかな…。)

法子は、身体が全体的に引っ張られている感覚に襲われる。

法子の身体は、少し背と髪が伸び、イリスの容姿に変わっていく。  
光樹はその過程を驚愕しながら見つめている。

法子の変貌が落ち着いた時イリスは、

「法子に許可を頂き、少しだけ身体をお借りしました。」

「あ、ああ…。」

まだ驚きを隠せないよう、光樹はやつとの思いで返事を返す。

イリスは、しばらく光樹が落ち着くのを待って、

「初めまして。イリスと申します。」  
と挨拶する。

「初めまして。有坂光樹です。」

光樹も返事を返す。

「法子の言う“意識”…。私のこと、認識していただけましたか？」

「はい。驚きましたが…。」

イリスは頷くと、

「法子の負担になるので、戻ります。」

「はい…。」

光樹は呆気にとられるように返事する。

イリスは目を閉じると、法子の身体は元に戻っていく。

イリスは法子の意識の所に戻ると、

「大丈夫でしたか？」

と心配そうに声をかける。

「正直、身体が引っ張られているように痛かったわ…。」

「視覚に訴えるのが一番だと思ったので、一時的に身体を私の容姿

にしましたから…。」

「若干だけど、イリスの方が背が高いから、引っ張られている感覚だったのね…。」

「そろそろ、戻りましょう。」

「そうね…。」

法子は頷くと、次の衝撃を覚悟する。

(あまり、好きになれないわね…。)

今度は、上に吸い込まれる感覚を受け、法子は思う。

目を開けると、光樹が目の前で見つめている。

「教授…。驚きますよね…。」

法子はそう呟くと、光樹も緊張の糸が緩むように

「志田君か…。正直、夢を見ているようだよ。この世界は現実ではない、志田君は別の人になる…。」

「私も、イリスに貸したのは始めてだったので…あまり貸す事はな  
いと思いますが…。」「他のカードでも、先ほどの現象は起きるの  
か…?」

光樹は少し困ったように尋ねる。

(どうなの？イリス。)

『出来ないことはないですが…私と法子は、大きく背格好が違わな  
いから、負担があれで済みますが…。』

(そういう事ね…。)

「イリスが言うには、可能だけど…。容姿が違っているほど、負担  
がかかるようです。」

「そうか…。志田君は大丈夫だったのか…?」

「はい。イリスの方が少し背が高いので、身体が引っ張られている  
感覚があつたくらいです…。」「そうか…。それで、話がだいぶそ  
れたが、カードのことを調べて何かわかるのか?」

「ええ…。久美さんのカードが解放されたのがわかれば…。」

「そうか…。久美さんも、志田君も、ひかりと親しかったからな…。」

「久美たんのことも思い出しているし、光樹さんはもう大丈夫だね…。」

## # 21 心痛・悲哀邂逅

法子は本を開き、内容を確認する。

（陽ちゃんたちは一緒に…久美たんは、タロットで…。  
うん。いくつか、キーワードがわかったわ。）

光樹は、法子が思索を巡らせているのを見届ける。

「教授。スケッチブックを借りていいですか？」

「ああ…使ってくれ。」

（イリス、キーワードを関連付けして、図式化できる？）

『できますよ。ちょっと待って下さいね…。イメージ送ります。』

（えっと…右手を貸すから、書いてくれないかな…？ちょっと試したいこともあるし…。）

『いいですが…。無理しないでくださいね。』

（ええ、大丈夫よ。ありがとう。）

『では、いきますよ。』

法子は、右腕が外に引き込まれてなくなる感覚を受けながら、イリスを信じて身を委ねる。

『では、使わせていただきます。』

イリスは法子の右手を使い、キーワードの図式をスケッチブックに書き込んでいく。

（さて、わたしのほうは…。）

法子は左手を使い、隣の手帳を開いて書き込んでいく。

光輝はその様子を見て、驚嘆と不安を入り混ぜたように尋ねる。

「両手を同時に使っているようだが…。それもイリスの力なのか…？」

法子は視線を手帳から逸らさず、手を休めずに答える。

「先ほどの応用で…イリスに右手を貸して書いてもらっているんです。」

「そんなこともできるのか…？」

「今初めてですが、何か応用できるのではと…慣れておきたくて。」

「そうか…。」

光輝はそれだけ言っと、口を閉ざす。

しばらくすると、イリスが法子に伝える。

『終わりました。右腕、お返ししますね。』

（ええ。ありがとう…。）

法子は、右腕が身体に引き込まれ戻る感覚を覚え、落ち着くのを待ちながら、左手を使い作業を続ける。

『法子、もう右腕使えますよ。』

イリスがそう伝える。

（わかったわ。）

法子は、左手は作業を続けながら、右手を握ったり開いたりして、感覚を確認する。

（ふと思っただけ…。イリスだけじゃなくて、他のみんなもできるのかな…？）

『ちゃんと心が通じ合っていて、信頼合っていれば、可能だと思えますよ。』

（そうなんだ…。みんなと合流したら、話してみるわ…。）

『そうですね。』

作業が終わり、スケッチブックと手帳を確認し、光輝に説明を始める。

「教授、この図式を見てください。」

スケッチブックにかかれているのは、あかりはもちろんのこと、光輝や法子、陽たちの名前と…下には分かっているカード、そしてヴァルティアリスの名前が書かれ、線や矢印や書き加えられている。「これは、わたしたちとカードのつながりの相関図です。マジシャン…“始まり”のカードはあかりちゃんが所有しています。」

「そうなのか…。陽ちゃんたちや君だけでなく、わたしもカードを所有しているんだな？」光輝は説明を聞いて尋ねる。

「はい。タロットに詳しい久美ならもつとちゃんとした説明が出来ると思いますが…教授のカードは、エンペラー…“支配”のカードです。」

「“支配”…。」

「どんな能力を秘めているかはわかりませんが…。 “支配”がキーワードになっているはずです。」

「そうか…。ところで、この世界から抜け出すのとどういう関係があるんだ…?」

「この世界は、教授とあかりちゃんの…ひかりさんを失った悲しみが起因していますが、あかりちゃんや私たちがカードを持っていることも要因の一つではないかと…。」

「それで…?」

「特にあかりちゃんのカードは“始まり”を意味するマジシャン…引き金・トリガー…になっている可能性が高いです。」

「なるほど…。」

カチャ…パタン。

突然、玄関から音がした。

(帰ってきたようね。あかりちゃんたち…。)

「パパ、帰ってたんだね。」

「うん。あかりがそろそろ帰ってくると思ったから、助手の志田君と一緒に待っていたんだ。」

「こんにちは。あかりちゃん。」

そして、ひかりの方を向き

「お邪魔しています。ひかりさん。」

ひかりは

「いつも夫がお世話になってます。」

（やっぱり、私に関しての知識はないわね…。さあ、これからね。）  
心の中で一呼吸して、あかりに尋ねる。

「あかりちゃん。タロットカードって知ってる？」

「見たことある気がするけど…。」

「えっと…。マジシャンとか、太陽、星、月とかがあるカードなの

…。」

「えっと…。どっかで見たことあるはずなんだけど…。」

（もう少し…。ヴァルティアリスはまだ気づいていないみたいね…。）

『法子、手帳で能力を使えるようにしました。タロットカードを思い浮かべて、見せられるわ。』

（ありがとう、イリス。助かるわ。）

法子はバッグから手帳を出し、探すふりをしながらあかりが見たタロットカードを想像する。

「あつた！あかりちゃん、見てみて。これがマジシャン。」

あかりが手帳を覗くと、驚きながら、

「あつ！思い出した。病院のベッドで夢の中で見たの。」

「そうなの？そのあと見たのはこれじゃなかった？」

法子は次のページを開き、太陽のカードの絵をあかりに見せる。

「うん！太陽だった。なんで知ってるの？」

不思議そうに法子を見るあかり。

「陽ちゃんたちに聞いたのよ。タロットは久美から教わったもの。」

「…陽ちゃん…。久美さん…。」

陽たちの名前が出たことで、違和感を感じるあかり。

(出すなら、今だわ。)

「覚えてないの？えっと…。」

法子はそう言つて、手帳に挟んでいた三人が写っている写真を取り出しあかりに見せる。

「これが陽ちゃん。そして、紗夜ちゃん、愛美ちゃん。」

指差しながらあかりに教えるように、確認する。

「…あっ！」

「思い出した？あかりちゃん。」

「うん。病院に来てくれたお姉ちゃんたちだ！」「久美はあかりちゃんにこのカードを見せたでしょ…？」

法子は手帳をめくり、テンパラスの絵をあかりに見せる。

「うん。このカード…。この後、そういえば…。」

あかりは久美とオルディアスに行ったのを含め、いろいろ思い出したようだ。

(もう良いわね…。次はヴァルティアリスを…。)

法子は、ひかりの方を向くと、

「お久しぶりですね。ひかりさん…。」

ひかりは、動揺を隠すように平然を装い

「本当にお久しぶりですね。法子さんですよね…？」

(やっぱり…本当のひかりじゃないわ…。)

「ええ。久しぶりにあかりちゃんたちの顔を見たくて、教授と待っていたんです。」

「そうなんですか。」

「久美のことは覚えてます？」

「えっと…最近逢っていないから…。」

「そう…？」

(そろそろ…いくわ。何かあったらサポートしてね、イリス。)  
『わかりました。』

少しの沈黙を作り、法子が口を開く。

「もう茶番は止めましょう…。ひかりさん、いいえ…ヴァルティアリス！」

ひかり…ヴァルティアリスは驚き、

「法子さん？」

と尋ねる。

（まだ…ごまかすつもりかしら…。わたしは、もう騙されないけど…。）

このことを知らないあかりが、動揺しないわけがない。

法子の言うことを信じてもらえなければ、あかりは間違いなくヴァルティアリスについて行くだろう。

「悪いけど…ひかりさんは、私たちのこと…そう呼ばないから。」

法子はヴァルティアリスに言い放ち、あかりに尋ねる。

「今のあかりちゃんなら知っているわね？私たちがなんて呼び合っているか…。」

あかりは昔を思い浮かべる…。

あかりがまだ、3歳くらいするときだろうか。

母のひかりはもちろん、他に二人の女性。

「ひかりん、あかりちゃん。」

「なあに…のっこ？」

「ケーキ食べない？作ったんだけど…。」

「のっこのケーキ、久しぶりだね…。何かあったの？」

「ずっと、教授と一緒に研究をつづけてきてるけど…。」

「光輝さんと？」

「うん。それでやっと論文が出来て、一つの区切りがつきそうなの。」

「やったじゃん！のっこ…！」

「ありがとう。久美たん。」

「でも、ひかりんも知ってたんじゃないの？」  
「光輝さん、仕事のことは何も話してくれないから…。」  
「そうなの？私からも言っておあげようか…？」  
「ううん…。いいの。のっこから聞けるし…。」  
「ひかりん…。」  
「じゃあさ、光輝さんに内緒で、お祝いのサプライズしようか？」  
「久美たん、そういうの好きだよね…。」

（そういえば…久美さんも、法子さんも、小さい頃からお母さんと一緒だったんだ…。）  
あかりは法子のほうを向き答える。  
「法子さんは“のっこ”って、久美さんは“久美たん”ってお母さん呼んでた！」

（さあ、ラスト！）  
法子は、ひかりに身体ごと真っ向から立ち向かうように言い放つ。  
「どんな深い悲しみだとしても…私たちの絆は断ち切れないわ！」  
「…。」  
言葉を失うひかり。  
憂いを込めた口調でひかりに問う法子。

「もういいでしょ！？ヴァルティアリス…。教授とあかりを返して…。」  
『法子さん。指輪をヴァルティアリスに向けて！』  
（わかったわ！）  
いきなりのイリスの指示にすぐさま反応する法子。

法子がヴァルティアリスに向けた指輪は…ヴァルティアリスを中心軸に放射状に光を放つ。

『さあ、二人を光の中へ!』

(ええ。)

次の指示を法子は二人に告げる。

「教授、あかりちゃん。この光の中へ!」

「ああ。わかった!」

光輝はあかりの手を取り、光に飛び込む。

『法子も向けたまま、ヴァルティアリスへ走って!』

法子は指輪を突き出したまま、ヴァルティアリスへ向けて走る。

(真っ白で…何も見えない…。)  
気づくと法子は気を失った。

光輝とあかりは気づくと、真っ白な空間の中にいた。

立っているのか、浮いているのかもわからない。

どこからともなく声が聞こえる。

「あかり、光輝さん…。」

二人には、聞き慣れた優しい声。

「お母さん!」

姿の見えない声に向けて叫ぶあかり。

「ひかり、君なんだな…。」

声の主に、ひかりかどうか尋ねる光輝。

「ええ…。話すのは…これが最後だけ…。」

ひかりがそう言うと、光輝とあかりの頭に過去の記憶がよぎる。

病院のベッドに寝ている女性。

顔は青白く、病気なのがすぐわかる。

ベッドの隣には30代くらいの男性と、小さな女の子。

「あかりちゃん…。光輝さん…。わたし、もうダメだわ…。」

「お母さん…。」

普通なら泣きじゃくり、だだをこねるように叫ぶことだろう…。  
もう…それさえも前に何度もあり、お互いにそれが何の為にもならないのを理解している。

長い沈黙…。

その後、口を開いたのはひかりだった。

「光輝さん、あかりをよろしくね…。」光輝はしっかりと分かるように頷いて、

「ああ、わかった。」

と答える。

弱々しく頷き、あかりのほうに声をかけるひかり。

「あかりちゃん、お父さんと仲良くね。」

「うん！約束する。」

懸命に大丈夫という気持ちを含めて答えるあかり。

そんな娘に微笑み、ゆっくりと目を閉じるひかり。

その後、ひかりは眠るように息をひきとる。



## #22 離別：終乃言葉

再び白い空間…。

「思い出したのね…。そう、わたしはもう…。」

光輝も、あかりも、頬から涙を伝ったまま拭うこともせずひかりの言葉をかみしめ、次の言葉を待っている。

「私がいなくても大丈夫…。のっこや久美たん、周りのみんなが助けてくれるわ…。」

光輝もあかりも、黙って頷く。

引き留めることはできない事を二人は知っていたから…。

「そろそろ…行かなきゃ…。」

二人は涙を流しながら…声も出せずに、ひかりを見つめ続ける。

「さあ、二人とも前へ…あなたたちは未来へ！」

視界がぼやけたように白く眩しくなり…二人は目を瞑る。

その頃、法子は別の空間であるものを見ていた。

「これが…ヴァルティアリスの本体…。」

『そのようですね…。』

二人とも思わず呟く。

厚さは約1m強、幅は4mくらいだろうか。

そして高さが10m超えている。

どういう素材かはわからないが、上は右回りにゆっくりと…下は左回りにゆっくりとねじれているが…中心はねじれていない。

中心からは小さな板状のものが放射状に散らばっては5mくらいの

範囲で消え、現れては中心に戻ってゆく。

そして、それを囲むようにしてそびえる6本の柱。

(あれ…！？なんか違う気がする…。)

『法子。もう一度本で調べてみますか？』

(ええ…。何かわかるかも…。)

法子はイリスに指示して本を具現させると、

ヴァルティアリスという言葉をイメージして集中する。

ヴァルティアリスのページを開くと、読み始める法子。

(これって…もしかして…。)

『何かが、意図的に負荷をかけるために…細工したようですね…。』

6本の柱は、ヴァルティアリスを守るのではなく、負荷をかけるためのものだった。

(壊せるかしら…。いいえ、被害が大きくなる前に壊さなきゃ！)

『今度は、それを調べるのですね？』

(ええ、サポートお願いね。)

『わかりました。』

法子は一度本を閉じると、目を閉じてさきほどの6本の柱をイメージに集中する。

再び本を開けると、今ここにある6本の柱だけではなく、形状などはわからないが…いくつもあることが確認できる。

「クアレク・ラモーブ…。」

思わず呟いたその名前と、過剰に一部のマイナスになりうる能力を加速させる、ということ…そしてこの柱の弱点は…。

「これって…。」  
そこに書いてあったのは、

力のバランスを崩せば、更に負荷が発生する…という文章。

(簡単には行かないみたいね…。)

『同時破壊か、もしくはバランスを見ながら倒すようですね…。』  
しばらく考えていると、ふと気づいた法子はイリスに尋ねる。

(イリスには、攻撃能力はあるの?)

『あるにはありますが…あくまで護身用なので、破壊には向いていません。』

(知識と愛…。補助に優れた能力…。)

『私だけの攻撃能力では、あの柱は破壊できそうにありません…。』

(何か方法があるはず…。イリス、具体的にどういう補助ができる?)

『まず、本による知識の補完です。次に、指輪による能力ですが…大きく分けると…回復、増幅、結界の3つです。』

(なるほどね…。)

説明を聞いていた法子は、ふと閃いた。

(結界はどんな効果を出せるの?)

『反射、増幅、吸収、無効化です。』

(特定の相手に結界を二重に張れる?)

『そのような事はしたことありませんが、可能かと思えます。』

(やってみましょう、イリス。)

『わかりました。まずは概要を…。』

(ええ、ターゲットの中心はヴァルティアリスで単体を囲むように、  
反射の結界。)

『張れるのは最長で3分くらいですが、大丈夫ですか?』

(ええ、柱の耐久性にもよるけど…。)

『次は、どの様にするのですか？』

(中心は同じくヴァルティアリス、範囲は柱ごと囲うように同じく反射と、さらに増幅の結界を…。)

『結界と結界の間で、増幅と乱反射を起こして自滅させる…。ということですね…。』

(そういうこと…。出来そうかな？)

『はい。その方法以外に思いつきません。』

出来るかどうか、わかりませんがやりましょう。』

(できる限り近づいた方がいい？)

『そうですね。柱から300mくらい離れたあたりがいいかと…。』  
イリスは法子にかかる負荷を考慮し、そう告げる。

ヴァルティアリスとの距離を目視しながら走る法子。

(そろそろかしら…。)

足を止めると、呼吸を整えて準備する。

(始めていいわ、イリス。)

『はい。つらければ言っして下さいね。』

法子は目をヴァルティアリスに向けながら、集中して結界のイメージを描く。

『指輪をかざして下さい。』

法子が指輪をかざすと指輪は光を放ち、ヴァルティアリスを中心に結界が広がっていく。

ヴァルティアリスを囲むように半径12m、さらに柱を囲むように半径30mの結界。

結界が広がり終え、光線が交錯するにしたがって、法子の指輪をかざした手に衝撃が走る。

( ちょっと、きついかも…。 )  
衝撃に耐えながら、指輪をかざしている手首を手でつかみ、支える。反射と増幅を繰り返し、ますます衝撃は強くなっていく。

腕だけでは支えきれず、片膝をつき指輪をかざし続ける。

しばらくすると、遠目からわかるくらいに6本の柱はねじれていく。  
( このままだと、消耗するだけだわ…さらに手をうたないと…。 )

『 法子…だいじょ…ぶで…す…か…? 』

自身も力をかなり消耗し、言葉が途切れながらも気づかうイリス。

( イリス、帰りは任せるわ…! )

『 法子、何を…! ? 』

衝撃に耐えながら立ち上がると同時に、反動をつけ両手をヴァルティアリスにかざしたまま走りだす。

( あの高さだと、結界から10mくらいが限界ね…。 )

近づくたびに強くなる衝撃に耐えながら、法子は指輪をかざしながら走りつづける。

目標地点にたどり着くと、膝をついてから、腕を伸ばしたままつぶせになる。

まるで腕をスナイパーライフルのように、ヴァルティアリスに向けながら…。

しばらくすると、ねじれが限界を超えた柱は火花を散らして、倒れこんでゆく。

( もう…すこし…。 )

衝撃と伸ばし続けて麻痺しかけている苦痛に耐えながら、終わりの時を待ち続ける。イリスも力を消耗していたが、法子の覚悟と自身

に対する信頼、そして法子が縮めた距離に対する軽減、その気遣いが力をより強いものにしていた。『法子とヴァルティアリスを絶対に守ってみせます…。』』

六本の柱が火花を散らしながら全て崩れ落ちるのを見届けて、イリスは法子に伝える。

『もういいですよ。法子…。』

(りよ…かい…。)

イリスの声を聞いた法子は腕の力を抜き、

(イリス。あとよろしくね…。)

と伝えると、意識を手放した。

『ええ。愛しい人たちの元に送り届けます。』

イリスは意識を失った法子に伝え、憑依するため神経を法子の身体に研ぎ澄ます。

法子の身体がイリスの身体に変わると、指輪を天にかざし念じる。

『法子が愛する者たちのところへ…。』

指輪が光を放ち、身体を包み込み始めた時…ヴァルティアリスが感謝するように、優しい光を放った。

指輪からの光が収まり始め、光樹やあかりたちがいる場所に着いた瞬間を見計らってイリスは憑依を解く。

光樹やあかりたちにイリスである姿を見せないように…。

久美が真っ先に法子に駆け寄る。

「法子！」

呼吸などを確認し、気を失っただけだと確認した久美は胸をなで下

るし、

「大丈夫、気を失ってるだけだわ。」  
とみんなに伝える。

「ん…。」

法子が目を覚ますと、みんなが覗き込んでいる。  
心配させたのを感じつつ、

「もう大丈夫。ごめんね、みんな…。」

次に声をかけたのは、光樹。

「法子くん、無事でよかった…。」

法子は彼のほうを向き、返事をかえず。

「教授…。」

紗夜は、

「全員揃ったことですから、一度戻りませんか…？」  
と提案し、

「そうだな。あたしもそう思う。」  
と陽も同意する。

「あかりちゃん、準備はいい？」

愛美が自身の同意とみんなの同意を促すように、あかりに尋ねる。  
あかりは頷くと、

「私もサポートするから、一旦帰りましょう。」  
と、あかりの手と自分の手を重ねる。

それを合図に次々と全員が手を重ね、目を閉じる。

しばらくして目を開くと、現実の病院へ戻った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4065c/>

---

0 から始まる創造世界-ファンタジア-{創記伝承Oldius-オルディアス-プロローグ

2011年10月4日03時06分発行